

竺法護訳『普超三昧経』の日本古写経三種と版本大蔵経諸本の関係について

宮崎展昌

The Relations among the Three Kinds of the Old Buddhist Manuscripts in the
Japanese Collection and Woodblock Print Canons: With Reference to the
Puchao Sanmei Jing

Tensho Miyazaki

This paper mainly aims to explore how Chinese Buddhist canons are transmitted and related to each other by investigating variant readings shared among the available extant materials of one specific Buddhist text, the *Puchao Sanmei Jing* (PSJ), which is one of the extant Chinese versions of the **Ajātaśatrukaukṛtya(prati)vinodana*, translated by Dharmarakṣa in the third century.

This paper directly examines the following eight kinds of Chinese Buddhist canons and materials:

- Three kinds of old Buddhist manuscripts in the Japanese collection: Shogozo scrolls, Nanatsu-dera canon, Kosho-ji canon.
- Four kinds of woodblock print canons: First Koryo canon, Second Koryo canon, Fuzhou canon preserved in the Imperial Household Agency, and Qisha canon.
- Fangshan stone sutra, which seems to be based on the Qidan (Khitan) canon.

In addition, for the sake of convenience, I will consult the variant readings of the Sixi (Song), Puningshi (Yuang) and Jiaxing (Ming) canons recorded in the footnotes of the Taisho canon.

The Jingnan canons, that is, the Fuzhou, Qisha, Sixi, Puningshi, and Jiaxing canons, include the four-volume version of the PSJ. They also share so many variant readings that they seem to form a group independent of the three-volume version of the PSJ in the other canons and materials. According to the accounts on the PSJ in the traditional translation catalogs, the three-volume version of the PSJ and the four-volume version of the PSJ seem to have been separated at latest before the sixth century, and its four-volume version has been circulated around the Jingnan region since the sixth century. Therefore, the four-volume version of the PSJ in the Jingnan canons could be based on such a version of the PSJ circulated in the Jingnan area.

The investigations of variant readings shared among the three kinds of old Buddhist manuscripts in the Japanese collection and shared between the two versions of Koryo canons confirm that they form two different groups: one is the old Buddhist manuscripts in the Japanese collection group, and the other is the Koryo family. In the former, the Shogozo scroll seems to be the ancestor of the other two because of its history and its few unique variants. For the Koryo family, the two versions are siblings whose parent is the Kaibao canon, the first woodblock print canon, because they have apparent differences in line breaks and paragraphs.

It is remarkable that the first Koryo canon and the three kinds of Japanese manuscript canons share a significant number of variant readings, especially in Volumes II and III. In contrast, the first volume includes only one meaningful variant shared by the above materials. As far as Volumes II and III are concerned, I can assume that the first Koryo canon is quite close to the old Buddhist manuscripts in the Japanese collection, especially the Shogozo scrolls. On the other hand, the first volume is not so close. At this point, I suggest the possibility that the first volume of the First Koryo canon or its ancestor was revised by consulting with the other material(s), which might be quite close to the Khitan canon.

竺法護訳『普超三昧経』の日本古写経三種と版本大蔵経諸本の関係について

宮崎展昌

第一節 はじめに

本稿では、竺法護訳『普超三昧経』という個別の漢訳典籍を取り上げて、日本古写経三種と版本大蔵経諸本の相互関係について、主に諸本間でみられる異読の共有関係から探ることを試みる。導入となる本節では、はじめに、竺法護訳『普超三昧経』について簡単に紹介したのち、本稿で扱う大蔵経諸本の資料について概観する。

第一節 第一項 竺法護訳『普超三昧経』について

竺法護訳『普超三昧経』は〈阿闍世王経〉の現存する漢訳完本の一種として知られる。〈阿闍世王経〉には完本として、他には支婁迦讖訳『阿闍世王経』と宋・法天訳『未曾有正法経』、および、チベット語訳一種が現存する。サンスクリット語本についてはアフガニスタン出土の断片やチベットで発見された抄本が知られるだけで、現時点で完本の現存は確かめられていない。

ほかに部分訳としては失訳『放鉢経』が現存する。竺法護訳『普超三昧経』は現存する〈阿闍世王経〉完本諸本のうちでは、支婁迦讖訳について二番目に古いものである^①。

三世紀後半から四世紀初頭にかけて活躍した翻訳僧である竺法護は敦煌の出身とされ、『普超三昧経』の他に『正法華経』や『光讚般若』などの多数の大乗經典などを訳出したことが知られる。鳩摩羅什が活躍するより前の、古訳時代を代表する訳経者のひとりである。現存最古の経録である『出三藏記集』の記録によれば、『普超三昧経』は太康七年（二八六）に訳出されたとされる。既に先行研究が明らかにしているように、同年には、長安にて『正法華経』や『持心梵天所問経』『光讚般若』が竺法護によって訳出されたとみられ、彼の翻訳活動がひとつの盛期を迎えていた頃に訳出された典籍のひとつと推測できる^②。

次に、經典のタイトル、経題については、「大正新脩大蔵経」（大正蔵）の巻上の冒頭および目録では「文殊支利普超三昧経」と記載されるが、傍点を施したように、通常の Mañjuśrī の音写語「文殊師利」とは異なる。これに関しては、管見の限り、近世以前の大蔵経諸本に、そのような経題をそな

えたものは確認できていない。おそらくは「大日本校訂大藏經」（縮藏）でみられた誤植を大正藏が受け継いだものと推測される。^③正しくは「文殊師利普超三昧經」と表記されるべきであろう。また、「文殊師利」を含んだ経題は今回報う諸本のいくつかでも確認できるが、次節で確認する経録の記述の多くでは、「文殊師利」の表記は現れず、同時に、同経のなかで Manjusi が訳出される際には、音写語の「文殊師利」「文殊」は一度も用いられていないことを考慮すると、後世の伝承過程において付加されたものと推測することができる。よって、本稿では『普超三昧經』の名で呼ぶことにする。

卷数構成については、現存する大藏經諸本によって三卷本のものと四巻本のものがみられるが、これについては経録類の記述と併せて後ほど詳しく検討する。

第一節第二項 本稿で検討対象とする写本一切經および版本大藏經の諸本について

本項では次節以降で検討する写本一切經および版本大藏經の諸本について概観する。

1 日本古写經の三種―聖語藏經卷、七寺一切經、興聖寺一切經

本稿では、日本に伝存する古写一切經のうち、①聖語藏經卷、②七寺一切經、③興聖寺一切經の三種を直接扱う。①は奈良・東大寺の塔頭である尊勝院聖語藏に伝わったもので、奈良時代天平期に書写された経卷やそれ以降に日本で書写あるいは刊行されたもの、中国よりもたらされた経卷などを集成

したものである。②と③はともに平安末期から鎌倉時代にかけて本邦で書写された写本一切經を主体とする。

①聖語藏經卷は、奈良朝において国家的事業として書写された写本一切經數種を母体としながら、^⑥様々な来歴を持った経卷が長年にわたって集成されたものであり、現在、およそ五千卷が伝わる。あとにみる二種の古写一切經がその当初から一切經として書写することが企図され、整備されたものを主体とするのとは異なる。大正新脩大藏經編纂の際には校合のために閲覧することが特別に許された聖語藏經卷だが、それらを研究者が用いることは長年容易ではなかった。しかし、近年、この貴重な経卷群をデジタル撮影したものが、『宮内庁正倉院事務所藏 聖語藏經卷』（丸善（現在は丸善雄松堂、二〇〇〇））というかたちで発行され、研究者がそれらを参照することはかなり容易になった。本稿でもその画像データを利用する。

その聖語藏經卷に含まれる『普超三昧經』三卷については、唐代の中国から日本にもたらされた経卷を意味する「唐經」として分類されてきたものであり、隋代にもたらされたとみられる「隋經」と並んで、聖語藏經卷のなかでも数が限られる、非常に貴重な資料である。先行研究によれば、「唐經」「隋經」のように、中国よりもたらされた経卷として分類されているものの中には、朝鮮半島や日本で書写されたものとみられるものも混入している例も報告されている。^⑦ただし、聖語藏經卷の『普超三昧經』三卷について、筆者がその現物を調査することも難しく、たとえそれが叶ったとしても、当該の経卷が中国から渡来したものか否かを判別する手段および能力を筆者は持ち合わせておらず、とりあえずは従来の分類に従って「唐經」とみておく。また、三卷のいずれにも奥書等はなく、そこから経卷の来歴をたどることは難しい。

ただし、いずれの経巻にも捺されている「東大寺印」の印影からは八世紀後半までに東大寺に納入されたものと見る事ができる^⑧。

書写の形式は一行十七文字の唐代写経の標準的なものであり、端正な文字で書写されている。注意を引く点としては、他本と校合して、もとの読みを訂正したよう形跡は、管見の限り、見受けられない。これは中国よりもたらされた舶来の経巻として、写経の際の藍本、あるいは勸経の際の証本などとして用いられたことを反映しているのかもしれない。

次にみていく、②七寺一切経と③興聖寺一切経は、ともに十二世紀後半の平安時代末期、中央ではなく、地方において書写された紙本墨書の一切経であり、両一切経とも、その主要部分に関しては五、六年ほどの短期間で書写事業が成し遂げられた点も共通している。

まず、②七寺一切経であるが、こちらは承安五年（一一七五）から治承三年（一一七八）にかけて、国司の大中臣安長の発願により、他の地方有力者からの寄進も得て、勸進僧の栄芸・栄俊らを中心とする総勢九十名あまりが関わるかたちで、尾張・美濃の複数の寺院にて書写された一切経である^⑨。同一切経は、その名のとおり、名古屋市中区の七寺の経蔵に伝存し、四九五四巻が現存する。現在、国際仏教学大学院大学の日本古写経研究所によって撮影・公開が進められており、本稿で用いる『普超三昧経』についても同研究所で撮影・公開しているものを利用する^⑩。

七寺一切経所収の『普超三昧経』に関しては、卷子本のかたちで三巻本が現存する。各巻の奥書には「又以勝本一校了」というものが見えるだけで、その具体的な書写された年代を知ることは難しい。ただし、「勝本」によって校合した結果であろうか、行間に記された異読が相当数確認できることが

同本の特徴のひとつになっている。あえて、「勝本」＝優れた写本、と記していることから、書写の際に底本としたものとは別本を入手して校合したと推測できる^⑪。その形式は一行十七文字の標準的な写経の形式であり、次の興聖寺一切経と比べると全体的に丁寧な筆致で書かれている。

次に、③興聖寺一切経は、もとは「西楽寺一切経」と呼ばれていたものを母体としたもので、平安初期に書写されものや室町期に補写されたものを含む写本一切経である。母体となった西楽寺一切経は、長寛元年（一一六三）から嘉応元年（一一六九）にかけて、丹波の亀岡盆地から綾部にかけての複数の寺院において、信西などの勸進僧が中心となって書写されたものである。その後、承元二年（一二〇八）以降は山城・海住山寺に移され、貞応三年（一二三四）には、同寺に住した貞慶上人の十三回忌にあわせて、上人ゆかりの薬師寺の僧侶らの助力を得ながら欠巻の補写がなされたとされる。慶長三年（一五九八）には、古田織部が創建した興聖寺（京都市上京区）に買い取られるかたちで移され、現在まで伝存している巻数は五二六一巻を数える^⑫。

興聖寺一切経所収の『普超三昧経』および『阿闍世王経』『放鉢経』については、二〇一六年に同僚であった大谷大学助教・渡邊温子女士の仲介によって、当時、同寺のご住職であった長門玄晃師より特別な許可をいただいて撮影することができたものである。ここに記して衷心より感謝申し上げる。

七寺一切経の装丁は卷子本と折帖本に改装されたものが混在しているが、興聖寺一切経については、同寺開山の虚応禅師によってほぼ全巻が折帖へと改装されており、『普超三昧経』三巻も折帖本のかたちで伝わる。巻中と巻下の奥書には「一校了」の文言が確認できるが、具体的な書写年代は不明であるが、京都府教育委員会の報告書によれば、平安年間の書写とされる^⑬。そ

の形式は先の二本と同様、一行十七文字を原則とする標準的な写経形式をとる。一部で筆がかなり乱れた箇所も含むが判読不能というほどではない。

本稿で検討対象とするのは右記の三種の写本であるが、現在筆者のもとには、高野山金剛峯寺所蔵の中尊寺金銀交書一切経所収本および石山寺一切経所収本の複写が入手できており、これらの古写一切経については近く調査を進める予定である。¹⁴

2 二種の高麗大蔵経と房山石経

次に版本大蔵経についてみていくが、まず、先に見た日本古写経三種と同じく、三卷本構成になっている、高麗大蔵経の初雕本と再雕本の二種および契丹蔵にもとづいたとされる房山石経について概観する。

まず、④高麗大蔵経初雕本は、十一世紀はじめに高麗にて開板された版本大蔵経である。同大蔵経は、十世紀後半に史上初の版本大蔵経として中国で開板された開宝蔵を底本にしたとされ、それと同じ版式の、一行十四文字、一紙二十三行を原則とする。同大蔵経は十一世紀ごろから侵犯を繰り返す契丹（遼）の退散を願って雕造されたが、版本は十三世紀前半のモンゴルの侵犯によって焼失し、全蔵を伝える版本は現時点では知られていない。しかし、京都・南禅寺には他の版本大蔵経と混合するかたちでまとめた分量の現存が確かめられ、朝鮮半島などに現存するものと合わせて、高麗蔵初雕本の版本は二千六百巻ほどが現存する。それらの現存する経巻については、当初は高麗大蔵経研究所のデータベース (http://ksutware.kr/rik_eng/index.do) において高精細なデジタルカラー画像がインターネット上で公開されていたものの、その後、中国より、域外漢籍珍本文庫編纂出版委員会編『高麗大蔵経

初刻本輯刊』（西南師範大学出版社、人民出版社、二〇一二）というかたちで影印版が出版された。本稿で扱う『普超三昧経』三巻もその影印本を利用する。同経については幸いにして三巻すべてが現存するが、巻下の一部の欠損がみとめられる。

次に、⑤高麗蔵再雕本は、右記のとおり、十三世紀前半にモンゴル侵攻によって初雕本が失われたことを受けて、そのモンゴル退散を願って高麗にて再び開板された版本大蔵経であり、一二四八ごろには完成したとされる。

版式は、初雕本と同じく、一行十四文字、一紙二十三行を原則とする。その制作にあたっては、単に初雕本もしくは開宝蔵を覆刻したのではなく、契丹蔵や他の版本大蔵経、朝鮮国内に伝存した写本などを用いて校合し、校訂作業を行なったとされ、『校正別録』三十巻というかたちでその記録も残されている。その版本は韓国・海印寺に現存し、版本の総数から「八万大蔵経」ともよばれ、所蔵寺院とともに世界文化遺産に登録されている。¹⁵ 現在、日本には室町期以降に招請された高麗蔵再雕本の版本が複数伝存する。江戸時代に行われた、明・嘉興蔵にもとづく鉄眼版と高麗蔵の校合事業¹⁶によって高麗蔵の方が優れた版本であるという評価が確立されたこともあって、大正蔵の編纂にあたっては、増上寺所蔵の高麗蔵再雕本が底本とされた。本稿では韓国・東国大学校から発行されている影印版を利用する。

高麗蔵の初雕本および再雕本での『普超三昧経』三巻に付される千字文号は「恭」字である。

次に、⑥房山石経であるが、同石刻経是北京郊外の房山雲居寺に伝わるものであり、隋・唐代の頃から制作が始まり、明代の頃まで続いたと伝わる。本稿で扱う『普超三昧経』については、「遼金代刻経」に分類される。その

制作年代は遼の道宗（一〇五六～一〇九三）の頃とみられ、遼代に作られた「契丹藏」とよばれる版本大藏經にもとづいたと考えられる。契丹藏は、高麗藏初雕本と同じ頃の十一世紀前半に遼において開板された版本大藏經とされ、おそらくは、その支配域であった燕雲十六州の近辺で入手された写本大藏經にもとづいたものと推測される。その版本の現存はごく限られたものしか確認されていないものの、房山石經の遼金代刻經の多くは契丹藏にもとづくと考えられ、その姿を間接的に知ることができる。房山石經のうち、契丹藏の版式のままに制作されたとみられる石刻經では、一行十七文字の標準的な寫經形式と同じであるが、用いられる千字文号が他の版本大藏經とは異なることで、契丹藏にもとづくと推測されている。その房山石經については、中国仏教協會・中国仏教圖書文物館編『房山石經』（華夏出版、二〇〇〇年）として影印本が刊行されている。本稿においてもそちらを利用する。

房山石經所収の『普超三昧經』三卷については、隋・唐代に製作されたものと同じく、縦長の大型の石板が用いられ、前後の經典と連続するかたちで、全部で七枚の石板に刻まれている。ただし、六枚目の石板は損傷が激しく、表裏とも文字をほとんど読み取ることができない。同經に割り振られる千字文号は「鞠」字であり、他の版本大藏經とも異なり、契丹藏にもとづいたものとみられる。

ちなみに、高麗藏初雕本と同様、開宝藏を覆刻した版本大藏經として、華北を支配下においた女真族が建てた金朝において、十二世紀中頃に開版された金藏（趙城金藏、広勝寺本などとも呼称）が知られる。金藏の版本は長らく失われたものと考えられていたが、一九三三年に発見され、その影印版は「中華大藏經（漢文部分）」などのかたちで公刊されている。ただし、今回扱

う『普超三昧經』は、再発見された金藏の版本には伝わらず、今回の調査に用いることはできない。

3 江南諸藏の二種——宮内庁所藏の福州版と磧砂藏

十二世紀前半以降、江南の各地において版本大藏經が開版されるようになり、それらはやがて、明代の洪武南藏や永樂南藏・北藏、嘉興藏、清代の龍藏へと受け継がれた。すなわち、明代以降に中国で開版された版本大藏經はいずれも基本的には江南諸藏の系譜に連なる。本稿では、それら江南諸藏のうち、限られたものを扱うが、江南諸藏所収の『普超三昧經』に共通した特徴として、四卷本構成である点を挙げることができる。この点については次節以降で検討する經録類・事彙類にみられる記述も考慮に入れて検討する。

本稿で直接用いる江南諸藏は、⑦宮内庁書陵部藏の福州版と⑧磧砂藏の二点である。

まず、前者の⑦宮内庁書陵部藏の福州版については、元は京都・法華山寺（現在は廃寺）に請来されたものが、石清水八幡宮を経て、現在は宮内庁書陵部の所藏・管理になっているもので、六二六四帖が現存する。¹⁸

福州版については、東禪寺本が一一一二年に完成したのち、同年に開元寺本が開板され、一一五一年に完成したとされる。日本には鎌倉期以降に請来された福州版大藏經が「宋版一切經」として複数伝わるが、いずれも両本の混合藏であり、宮内庁所藏本も同様である。¹⁹ それらの多くは日本に渡ってくるより前から両本混合のかたちであったとみられ、東禪寺本と開元寺本の両者の関係については未だ明らかになっていない点が多く残るものの、両本は深い関係にあったことは確かである。元来は民間の発願による一切經開板事

業であったが、のちに皇帝にも認められ、東禪寺本は「崇寧藏」とも呼ばれ、開元寺本は「毘盧藏」とも呼ばれた。

宮内庁所蔵福州版は、大正藏編纂の際にも対校本として用いられ、「宮本」とも呼ばれる。ただし、大正藏での異読の記載については、限られた時間での閲覧・調査であったためか、遺漏が比較的多いとされる。²⁰近年、その全面像がインターネット上で公開されたことで、従来に比べて格段に研究者がアクセスしやすくなった。²¹本稿ではインターネットで公開されるより前、二〇一五年に筆者が宮内庁書陵部にて複本を複写させていただいたものを用いる。宮内庁本の『普超三昧経』四巻はいずれも開元寺本であり、版本の形式は一行十七文字、一紙三十行であり、千字文号は「惟」が振られる。

次に、⑧磧砂藏であるが、この版本大藏経は大正藏の対校本にも用いられず、日本に伝わる磧砂藏は、他本との混合藏のかたちで一部伝わるものはいくつかあるが、まとまったものとしては杏雨書屋蔵本（もとは対馬・厳原八幡宮の所蔵で、二十世紀はじめに大蔵出版の蔵本になっていたとみられるもの）のみであり、日本の研究者にはやや馴染みの薄い版本大藏経のひとつである。²²中国では一九三一年に西安で磧砂藏の版本が発見され、その影印版は幾たびか発行されている。本稿では『影印宋元版 磧砂大藏経』（線装書局）所収のものを用いる。

磧砂藏は、南宋代の一二一六年に平江・磧砂延聖禪院で開板が始められたが、当初は個人による企画・寄付で開始された事業で、その進捗は緩やかであり、一二七六年に南宋が滅ぼされると、中断を余儀なくされた。十三世紀末の元代に事業が再開されて、全藏が完成したのは十四世紀に入ってからとみられる。南宋代には宋・思溪藏（湖州版）を底本とし、元代の再開以降は普

寧寺藏を底本としたとみられる。元代の普寧寺藏も思溪藏の覆刻を企図したものとされ、全体としては思溪藏の系譜に連なるとみなせる版本大藏経である。ちなみに、明代の洪武南藏は基本的には磧砂藏を底本としたとされ（一部は妙嚴寺版を底本とする）、その後の永樂南藏および北藏、清代の龍藏はいずれも洪武南藏の流れを受けていることを考えると、明代以降の中国で作成された勅版の大藏経諸本からみて、磧砂藏はかなり重要な位置を占めると言える。²³

磧砂藏本所収の『普超三昧経』四巻は、福州版と同じく、一行十七文字、一紙三十行の版本形式を原則とし、千字文号も同じく「惟」が振られる。

本稿では以上の二種の江南諸藏を直接参照したが、便宜的に、大正藏および中華大藏経に記載された思溪藏（宋版）、普寧寺藏（元版）、嘉興藏（明版）の注記も用いる。ちなみに、今後は増上寺所蔵の思溪藏と普寧寺藏、ならびに東京大学総合図書館所蔵の嘉興藏（別名、万曆版。白金・瑞聖寺の旧蔵本であり、関東大震災後に寄贈されたもの）についても直接参照して調査を進める予定である。²⁴

第一節第三項 本稿の目的と方法

冒頭でも述べたように、本稿では、竺法護訳『普超三昧経』について、前項で概観した諸本間にみられる異読の共有関係から、それらの相互関係について探ることを主たる目的とする。

先行研究によって、中国および朝鮮半島で雕造された、版本の漢語大藏経諸本については、次のような三種の類型があると推定されている。²⁵

表1 版本大藏經の三類型（禿氏・竺沙阿氏提案のものによる）

	版 式	現存大藏經資料の具体例
【第一類】開宝藏系	一行十四字、一紙二十三行	高麗藏（初・再）、金藏
【第二類】契丹藏	一行十七字、一紙二七～二八行	房山石經
【第三類】江南諸藏	一行十七字、一紙三十行	福州版、思溪藏、磧砂藏など

右記のなかで、契丹藏がいわゆる長安写經の標準的な写經形式を受け継いでいることなどから、他の版本系統より優れたものである可能性が指摘されている。一方、史上初の版本大藏經である開宝藏については、一行十四字という、一行十七字を標準とする写本形態からするとイレギュラーな版式であることと、蜀（四川地方）という辺境での開板事業であったことから、あまり優れた版本ではなかったという見方もされている。²⁶⁾

右の類型については、主に版本の形式および千字文号の割振にもとづいてなされたもので、版本大藏經諸本の系統を考える上で有益なものであることに疑いはない。

けれども、既に見てきたように、前世紀の末から今世紀に入って、これまで研究者らがアクセスすることが難しかった版本大藏經や日本に伝来する古写一切經の諸本について、先人らの努力と技術の進歩が相まって、研究者が直接参照することがかなり容易になってきた。それらの資料を用いて、個別の典籍について調査を深めることで、右記のような版本大藏經諸本の類型に関して、実証的あるいは批判的な研究をすべき時、できる時になりつつあると筆者は考えている。²⁷⁾ すなわち、これまでアクセスすることが不可能に近かった聖語藏經卷がデジタル媒体のかたちで公表され、また、各寺院で長年に

わたって受け継がれてきた写本一切經や版本大藏經についても、これまでに比べてアクセスしやすくなってきている。とりわけ、平安末期から鎌倉期にかけて書写・編纂された古写一切經については、国際仏教学大学院大学附置の日本古写經研究所で撮影・公開が進められてきたことはめざましい成果のひとつである。すでに、落合俊典先生が各所で指摘されていることであるが、本邦の写本一切經はやや時代が下る十二世紀ごろのものであっても、それらは基本的に八世紀の天平期に書写された写本一切經の系譜を承けたものであり、ひいては当時の中国・唐よりもたらされた写本群に連なる系統である。²⁸⁾ すなわち、日本に伝来する古写一切經の諸本は、版本大藏經が制作されるより前の、写本として流布していた漢文仏教典籍の姿を探るのに有効な手がかりとなりうる貴重な資料群である。

本稿では、右記のような問題意識のもと、具体的には次のような手順で検討を進める。

まず、四卷本構成である江南諸藏諸本に共有される異読を提示して、それらが三卷本構成をとる他本とは異なるグループを形成していることを確かめる。さらに、外的な資料として経録類および事彙類における『普超三昧經』の卷数についての記述を精査し、同經の四卷本と三卷本の由来・来歴を探ることを試みる（以上、第二節）。

次に、三卷本を含む諸本の相互関係について主に異読の共有関係から検討する。まず、日本古写經の三種の相互関係について確認する。特に本經に關しては、中国に由来するとみられる聖語藏經卷本が現存し、それとの平安写本一切經二種との具体的な関係について明らかにすることを目指す。次に高麗藏の二種、初雕本と再雕本の関係についても検討する。それらを踏まえ、

房山石經を含む、三巻本のかたちをとる諸本六種の関係について、異読の共有関係から探ることを試みる（以上、第三節）。

最後に、それまでの検討を総括するとともに、『普超三昧經』諸本に関する暫定的な伝承系統図を示し、今後の課題についても述べる（第四節）。

第二節 江南諸蔵所収の四巻本と他本所収の三巻本の来歴と相互関係

第二節第一項 江南諸蔵所収の四巻本に共有される異読

まず、江南諸蔵でのみ共有される異読を提示する。これらの異読は、江南諸蔵の四巻本が、伝承系統において、他本の三巻本とは異なる別のグループを形成していることを示す。²⁹

【巻第二】

- 塵／塵勞(三)(宮)(磧)(四〇七上六)
- 世法／世染(三)(宮)(磧)(同右)
- 無饒礙鎧(三)(宮)(磧)／無難鎧無罣礙鎧(再)／無難鎧無礙鎧(房)／無罣礙鎧(初)／無礙鎧(聖)(七)(興)(四〇七中八)
- 業起／起業(三)(宮)(磧)(四〇八上一二)
- 琦珍(三)(宮)(磧)／珂珍(初)(再)／

- 奇珍(聖)(七)(興)(房)(四〇八中一六)
- 「其翫習者則謂為名：其翫習者則謂報応：其翫習者則謂我所：其翫習者則謂慳貪：其翫習者則謂犯戒」(三)(宮)(磧)では「即」／om.「則」／(初)(再)では「即」／om.「聖」(七)(興)(房)(四〇九上二四以下)
- 罪／罪法(三)(宮)(磧)(四〇九中一)

二)

- 諸漏／諸有漏(三)(宮)(磧)(四〇九中一二)

- 諸通慧／諸通慧者(三)(宮)(磧)(四〇九中一八)

- 軟首／軟首童真(三)(宮)(磧)(四〇九下二二)

- 拳鉢品／奉鉢品(三)(宮)(磧)(四一上九)

- 隨取／遂取(三)(宮)(磧)／墜取(聖)(七)(興)(四一一上二七)

- 大目連／大目連言(三)(宮)(磧)(四一一中一二)

- 仏言／仏言曰(三)(宮)(磧)(四一一中一四)

- 光明王迦／光明王(三)(宮)(磧)(四一二上二〇)

- 自白仏曰／白仏言曰(三)(宮)(磧)(四一二上二三～一四)

- 聖衆／諸聖衆(三)(宮)(磧)(四一二下二二)

- 【巻第二】
- 時／時有(三)(宮)(磧)(四一三下一二)

五)

- 如来／如来來(三)(宮)(磧)(四一三下二二)

- 頸著／頸上所著(三)(宮)(磧)(四一三下二九)

- 一万衆人／一万人(三)(宮)(磧)(四一四中二七)

- 応時彼／応時於彼(三)(宮)(磧)(四一四中二八)

- 供養之／供養之後(三)(宮)(磧)(四一四下三)

- 邪友(三)(宮)(磧)／邪支(初)(再)／邪反(聖)(七)(興)(房)(四一四下二六)

- 我乎世尊父／我父世尊久(三)(宮)(磧)(四一五上二一～一二)

- 聞深妙業／日間深法(三)(宮)(磧)／■深法業(房)(■：illegible)(四一五中一六～一七)

- 無所不作／無不作(三)(宮)(磧)(四一五下一四～一五)

- 不俱／俱不(三)(宮)(磧)(四一六上一二)

●求塵勞者(三)(宮)(磧)／其求塵勞者(初)(再)／其求塵勞(聖)(七)(興)(房)(四一六上六)

●所求／所不求(三)(宮)(磧)(四一六上二四)

●諸法／法(三)(宮)(磧)(同右)

●無脫／無解脫(三)(宮)(磧)(四一六中三)

●故／故故(三)(宮)(磧)(四一六中二九)

●唯／唯然(三)(宮)(磧)(四一六下六)

●未曾(三)(宮)(磧)／未當(聖)／未嘗(四一六下二八)

●心而總統持／而心總持(三)(宮)(磧)(四一七上二九)

●譬／譬如(三)(宮)(磧)(四一七下一九など)

●有所說法(三)(宮)(磧)／諸所說法(再)(房)／者所說法(初)(聖)(七)(興)(四一八上八～九)

●衆会／衆集会(三)(宮)(磧)(四一八中一九)

●便而／而便(三)(宮)(磧)(四一八中

二五)

●無相／無相故(三)(宮)(磧)(四一八下二二)

●又／omit(三)(宮)(磧)(四一八下二八)

●故／故了(三)(宮)(磧)(四一九上六)

●儀容／威儀容(三)(宮)(磧)／威儀客(磧)(四一九上二〇)

●諸仏／仏(三)(宮)(磧)(同右)

●無極之施(三)(宮)(磧)／無極広施(再)(房)／無極広之施(初)(聖)(七)(興)(四一九中六)

●塗路(三)(宮)(磧)／途路(初)(再)／徑路(聖)(七)(興)(房)(四一九中一九)

●皆有(三)(宮)(磧)／遍有(初)(再)／変有(聖)(七)(興)(房)(四一九中二二)

【卷第三】

●可為／為可(三)(宮)(磧)(四一九下一一)

●譬／譬若(三)(宮)(磧)(四一九下一六)

●嚴莊／莊嚴(三)(宮)(磧)(四二〇上九)

●神鬼現(三)(宮)(磧)／鬼神変(初)(再)／鬼神現(聖)(七)(興)(房)(四二〇上一八)

●賜／歎(三)(宮)(磧)／湧(聖)(七)(興)(四二〇下一三)

●無侶／無伴侶(三)(宮)(磧)(四二一中一五)

●斯謂／謂斯(三)(宮)(磧)(四二二下一五)

●虚空(三)(宮)(磧)／虚無(初)(再)／処無(聖)(七)(興)／処住(房)(四二〇下一六)

●無本／本無(三)(宮)(磧)(四二二下一九)

●無異／omit(三)(宮)(磧)(同右)

●無／無有(三)(宮)(磧)(四二二上八)

●不汚心法／omit(三)(宮)(磧)(四二二上八)

●現在／現在心(三)(宮)(磧)(四二二上二五)

●不見其身／其身不見(三)(宮)(磧)

(四二二中一九)

●以／omit(三)(宮)(磧)(四二三上二六)

●不為／為不(三)(宮)(磧)(四二三中三)

●吾在／在吾(三)(宮)(磧)(四二三下一)

●無有実者／無而有実(三)(宮)(磧)／而無有実(聖)(七)(興)(四二三下二四)

●問曰／問(三)(宮)(磧)(四二三下二七)

●於彼／彼於(三)(宮)(磧)(四二四上四)

●汚染／染汚(三)(宮)(磧)(四二四上八)

【卷第四】

●化人／化人曰(三)(宮)(磧)(四二四中一五)

●心／心之(三)(宮)(磧)(四二四中二八)

●至得羅漢／得羅漢(三)(宮)(磧)(四二五上二二)

●天中天／天中之天(三)(宮)(磧)(四二五中一〇一―一一)	●仏故／故仏(三)(宮)(磧)(四二七上一八)
●閻浮提／閻浮(三)(宮)(磧)(四二五下四)	●以加／加以(三)(宮)(磧)(四二七上一九)
●溥首／溥首童真(三)(宮)(磧)(四二五下一一)	●經典／經(三)(宮)(磧)(四二七下一〇)
●決除疑網／決於疑網(三)(宮)(磧)／決疑網(聖)(七)(興)(四二五下一六)	●寇逆惡賊／寇賊惡逆(三)(宮)(磧)(四二七下一五―一六)
●智慧度無極／智度無極(三)(宮)(磧)(四二六上一一―一二)	●不能得／不得(三)(宮)(磧)(四二七下一六)
●焰迴(三)(宮)(磧)／燄廻(初)(再)／焰煙(聖)(七)(房)／燄燄興(四二六中八)	●人／天人(三)(宮)(磧)(四二八上一四)
	●諸邪行／諸邪見行(三)(宮)(磧)(四二八上一〇)

江南諸藏のみに共有される異読が右記のように相当数確認でき、巻数構成が他本とは異なる四巻本でもあることから、三巻本のかたちをとる他本とは異なる伝承系統を構成していることはほぼ疑いない。

第二節第二項 経録類・字彙類の記述に見る三巻本と四巻本の来歴

次に、江南諸藏における四巻本『普超三昧経』がどういった由来、背景を持ったものを探るために、経録類や事彙類における同経の巻数についての記述を調査する。

以下では、経録類・字彙類の記述を年代順に追うが、それらの典籍が編纂された地域にも留意し、さらに、経録であればその性格や編纂事情、具体的には、現物によった、いわゆる現存目録か、他の経録などの記述を集成・整理することによってつくられた標準目録なのか、といった違いについても注意する。

まず、現存最古の経録である『出三蔵記集』、および同じく梁代に編纂された事彙類二種の記述をあげる。^{③)}

●僧祐撰『出三蔵記集』(梁・五一〇―五一八年)

「普超経四卷」一名〈阿闍世王品〉。『安録』亦云：「更出阿闍世王經。或為三卷……」(大正藏五五卷 七二中)

○宝唱等集『経律異相』(梁・五一六年)

「出阿闍世王經下卷、又出普超三昧第二第三卷」(大正藏五三卷 一一四中)

○宝唱(?)『翻梵語』(梁)

「父陀尼子誤曰庄嚴女也 普超三昧経第二卷」(大正藏五四卷 一〇〇二下)

「寶陀羅地獄經曰集欲 普超三昧経第四卷」(大正藏五四卷 一〇三三中)

『出三蔵記集』では、本文では「四卷」とし、割注で「あるいは三卷」とするので、当時すでに三巻本と四巻本が存していたことを示唆する。本文で「四卷」を採用したのは、おそらく編者の僧祐が実見したものが四巻本であったと見ることができだろうか。^{④)} 同じく、梁で活躍した宝唱が編纂したとされる典籍二点では、いずれも『普超三昧経』は四巻本とされる。^{⑤)} これらの記述から南朝・梁の支配域、すなわち、江南地方では『普超三昧経』は四巻本として流布していた可能性が高い。

次に、六世紀末に隋によって南北朝が統一された直後に編纂された経録類

の記述をみていく。

●法経等撰『衆経目錄』(隋・五九四年)

「普超三昧経四卷」晋太康年
竺法護訳(大正蔵五五卷 一一七中)

●費長房撰『歴代三寶紀』(隋・五九七年)

「普超経四卷」太康七年出。第二訳。与漢世支識(阿闍世王経)本同、別訳。
亦云(普超三昧経)。亦云(文殊普超三昧経)見竺道祖雜録(大正蔵四九卷 六二中)

右の経録ではともに『普超三昧経』は四卷本とされる。ただし、『法経録』は隋による南北朝の統一後間もなく、統一王朝として、一切経編纂の基準とすべき「標準目錄」を短期間で作成しようとしたものである。また、その編纂にも参画していた費長房は、自身が編纂していた『歴代三寶紀』にも同様のものを付加したとされる。右の記述はともに、現物の典籍にはあらず、先行する経録類、おそらくは先に確認したような南朝、江南地方で編纂された経録の記述をもとにしたとみられる。

それらに対して、次に掲げる、七世紀に編纂された経録類・事彙類は、現物の典籍によった記述とみられ、いずれも長安近辺に流布したものにとづいたとみられる。

●彦琮撰『衆経目錄』(隋・六〇二年)

「普超三昧経三卷」晋太康年竺法護訳(大正蔵五五卷 一五六中)

●玄奘撰『一切経音義』(唐・七世紀中頃)

「普超三昧経三卷」玄奘(『慧琳音義』大正蔵五四卷 五一八下／五二〇中)

●静泰撰『衆経目錄』Ⅱ『大唐東京大敬愛寺一切経論目』(唐・六六三～六六五年)

「普超三昧経三卷」六十
七紙晋太康年竺法護訳(大正蔵五五卷 一九〇上)

●道宣撰『大唐内典録』「歴代衆経見入蔵録第三」(Ⅱ西明寺の蔵経検出用目錄、唐・六六四年)

「普超三昧経三卷」(大正蔵五五卷 三〇六上)

最初の『彦琮録』、別名『仁寿録』は、先行する勅撰の『法経録』が現物を検していないことを省みて、実際の典籍にもとづいて編まれた「現存目錄」である。他の二点の経録も長安の大寺院の現存一切経目錄である。玄奘は玄奘のもとで翻訳事業に従事した人物で、その音義が慧琳が撰した『一切経音義』に含まれ、三卷本の『普超三昧経』が言及される。これらの記述から七世紀の隋・唐初期の長安近辺では三卷本の『普超三昧経』が流布していたものとみられる。

次に、七世紀末の『大周録』以降の経録類の記述をみていくが、『大周録』以降は、現存目錄と標準目錄の統合を志向したものととして、基本的に三卷本と四卷本が併記される。

●明佺等撰『大周刊定衆経目錄』「見定流行入蔵録卷上」(唐(武周)・六九五年)

「普超三昧経一部三卷」或四卷。第二出。与漢世支識(阿闍世王経)同本別訳、亦云(文殊普超三昧経)、亦云(普超経)。十八紙(大正蔵五五卷 四六三上)

●智昇撰『開元釈教録』(唐・七三〇年)

(有訳有本録)「普超三昧経三卷」或上加「文殊師利」字、或四卷西晋三蔵竺法護訳第二訳(大正蔵五五卷五九四上)

(入蔵録上)「普超三昧経三卷」或四卷。或上加「文殊師利」字、亦直云(普超経一名阿闍世王品)。『安公録』云(更出阿闍世王経六十八紙)(大正蔵五五卷六八三下)

○『開元釈教録略出』（七三〇年以降）

『普超三昧經四卷』西晉三藏竺法護訳（大正藏五五卷 七二八上）

●『貞元新定釈教目録』『入藏録上』（唐・八〇〇年）

『普超三昧經三卷』或四卷。上加「文殊師利」字、亦直云「普超經」名阿闍世王品、『安公録』云「更出阿闍世王經」 六十八紙

（大正藏五五卷 一〇二八中）

先行研究によれば、『大周録』『見定流行入藏録』は、洛陽や長安、荊州などの複数寺院の藏經目録（＝現存目録）を持ち寄り、それらをもとに編纂されたとされる。³³すなわち、三卷本とは異なる四卷本がいずれかの寺院に所蔵され、別本の情報として割注に記載されたとみられる。『開元録』『入藏録』では「見行入藏」「見入藏」という文言も確認されるので、実際の経巻を確認しての編纂であったようだが、『大周録』の影響もあり、後世の扱いにもみるように、「標準目録」として色合いが強く、その「有訳有本録」「入藏録」ともに、三卷本と並んで四卷本が注記される。

次の『開元釈教録略出』については、『大周録』以降の経録で唯一、四卷本のみが記される。先行研究の中には、同経録は智昇が住した長安・西崇福寺の経藏目録として準備されたという説も見られるが、竺沙雅章先生や方廣鋳先生らの先行研究によれば、³⁴同経録は江南諸藏のみにしか伝わらないこと千字号が江南諸藏のそれと一致することなどから、江南に伝わった大藏經にもとづいて編纂された経録と推定され、『開元録』の編纂以降も江南地方では四卷本が流布していた様子がうかがえる。

以上、やや詳しく経録類・事彙類にあらわれる『普超三昧經』の巻数に関する表記を検討してきたが、次のようにまとめることができる。

【四卷本】六世紀前半の南北朝期、および八世紀半ば以降に、江南地方で

編纂された経録類・字彙類に四卷本の記述が確認できる。また、七世紀末の『大周録』以降、中央（長安や洛陽周辺）で編まれた経録類にも四卷本が注記される。ただし、南北朝統一直後の隋代に編まれた経録類にみられる四卷本の記述は、現物によらず、先行する経録類、特に南朝で編纂された経録類の記述によった可能性が高い。

【三卷本】七世紀以降、中央で編まれた経録類・字彙類に三卷本の記述が確認できる。それらの経録の性格上、実際の経巻にもとづいた記述とみられる。ただし、六世紀初頭の江南で編纂された『出三藏記集』でも既に三卷本が注記される。

以上の二点から、『普超三昧經』の四卷本は、六世紀初め頃から八世紀ごろにかけて、主に江南地方で流布していたことが推測できるの対して、三卷本は七世紀以降には長安や洛陽といった中央付近で流布していたと推測できる。

同時に、『出三藏記集』の記述から、六世紀初めころには、既に『普超三昧經』は既に四卷本と三卷本という伝承系統が分かれていたとみられる。『普超三昧經』の四卷本と三卷本のいずれがオリジナルのかたちであるか、すなわち、三世紀に竺法護が訳出した同経が三卷本構成であったのか、四卷本構成であったのかについては、ここまでにわかに結論を下すことは難しいが、³⁵遅くとも六世紀の初めには、巻数を異にする二つの伝承系統が分かれ、併存していたと考えられる。

十二世紀以降に雕造された江南諸藏の四卷本『普超三昧經』の由来については、右で検討したように、遅くとも六世紀ごろには江南地方で流布していたとみられる四卷本に由来を持つ可能性を認めることができると筆者は考え

る。実際に江南地方で流布していたとみられる同経の四卷本の写本などは失われて現存しないので、そのことを確実に示す証拠はない。けれども、四卷本が江南地方で流布していたとみられ、その江南地方で開板されたものに、他の版本大藏経等と異なる四卷本が収められており、三卷本の他本とは異なる読みを相当数共有することとは全く無関係とは考えにくい。

そこで問題になるのが、江南諸蔵の初めの二種である福州版および思溪蔵（湖州版）の底本である。従来、それらの開板作業の準備が始まる少し前、一〇七一年に民間へとその管理が移行された開宝蔵を底本とした、あるいは、開宝蔵の民間への管理の移行、それによって開宝蔵が民間に普及したという出来事が江南諸蔵の開板のきっかけとなったという見方がなされることもあったようである。³⁶けれども、本経『普超三昧経』のように、卷数構成も違えば、異読の共有関係も併せて見られるような場合、江南諸蔵が単に開宝蔵を底本としたということでは説明が難しいようにも思われる。すなわち、福州版および思溪蔵の開板に際しては、江南地方で流布していた写本一切経を底本として用いた、あるいは、開宝蔵を底本としながらも、江南地方で流布していた写本一切経などを用いて大幅な改訂、校訂作業が行われた、という可能性を考えてもよいようにも思われる。³⁷

方廣鋤先生が指摘するように、最初の版本大藏経であった開宝蔵は、勅版としてその印行もかなり厳重に管理、制限されていたためか、その開板後も写本一切経はすぐには駆逐されず、中国国内では十一世紀から十二世紀ごろにかけては写本一切経と版本大藏経（＝開宝蔵）は並存し、本格的に版本大藏経が写本一切経を駆逐するほどに普及し始めるのは、江南諸蔵が現れる十二世紀以降になつてからとみられる。³⁸そうした見方も考慮にいれ、江南諸蔵、

特に最初の二種である福州版と思溪蔵はどのような底本にもとづいて開板されたのかについては、今後検討を進めていく必要があると考える。

第三節 三卷本構成の諸本の相互関係について

本節では、三卷本構成をとる、日本古写経の三種、および高麗蔵の初雕本と再雕本、そして、房山石経の関係について、主に異読の共有関係から検討する。はじめに、関連が深いことが予想される、日本古写経の三種の相互関係について確認し（第一項）、次に高麗蔵の二種についても検討する（第二項）。最後に、それまでの検討を踏まえながら、三卷本構成をとる諸本の関係について総合的に考察することを試みる（第三項）。

第三節第一項 日本古写経の三種について

日本古写経三種——聖語蔵経卷、七寺一切経、興聖寺一切経の書写の形式や来歴等については、既に第一節で紹介したとおりであり、そのなかでも最も年代が先行する聖語蔵経卷本が他の二本の平安写経と具体的にどういった関係になっているのかについて、諸本での異読の共有関係から探っていきたい。

まず、日本古写経三種のみで共有される異読については次のとおりである。これらの共有される異読から、この三種は伝承過程において一つのグループを形成していることが確かめられる。

●【各卷冒頭の訳者名】／omit(聖)
(七)(興)

【卷上】

●励／厲(聖)(七)(興)(四〇七上三・
四一七上一)

●德本／德大(聖)(七)(興)(四〇七中
四)

●無難鎧無罣礙鎧(再)／無難鎧無罣
鎧(房)／無罣礙鎧(初)／無罣礙
(聖)(七)(興)／無罣礙鎧(三)(宮)
(磧)(四〇七中八)

●諛諂／諭諂(聖)(七)(興)(四〇七
中一五)

●静寞／静漠(聖)(七)(興)(四〇七
中二二)

●一法味／一切味(聖)(七)(興)／一
味法(房)(四〇八上一〇)

●惑乱／或乱(聖)(七)(興)(四〇八上
一一)

●支体／枝体(聖)(七)(興)／肢体
(房)(四〇八中一二)

●四十／四千(聖)(七)(興)(四〇九上
七)

●等御／等住(聖)(七)(興)(四一〇中
一八)

●於罣礙／所罣礙(聖)(七)(興)(四一
〇下一)

●随取／墜取(聖)(七)(興)／遂取
(三)(宮)(磧)(四一一上一七)

●察知／脈知(聖)(七)(興)／能知
(房)(四一二中七)

※倏忽／儻忽(聖)(七)(興)(四一二中
一三)

●予／吾(聖)(七)(興)／号(房)(四一
一中二七)

●無極／光極(聖)(興)／之極(七)(↓
光極)(四一二下七)

●四域／四城(聖)(七)(興)(四一二上
六・四二六上一九)

●餽／肴(聖)(興)／首(七)(↓肴)(四
一二下一七)

●各心／心各(聖)(七)(興)(四一三中
四)

●仁尊如／如来／世尊(如来(聖)(七)
(興)(四一三中一六・一七)

【卷中】

●清澄／澄清(聖)(七)(興)(四一三下
一七)

●効／敏(聖)(七)(興)(四一四上四)

●阿難律想利／阿那律想利(聖)(七)
(興)(四一四中二九)

●獲度／獲慶(聖)(七)(興)(四一四下
一六)

●為根／偽根(聖)(七)(興)(四一四下
二八)

●虚乏／虚之(聖)(七)(興)(四一五上
二九)

●答曰／答(聖)(七)(興)(四一六上二
一)

◎是之故王当知之無所住者則賢聖道
王／omit(聖)(七)(興)(四一六上二
二)

◎以斯本淨而為人演 五／omit(聖)
(七)(興)(四一六下二六・二七)

●德本／得本(聖)(七)(興)(四一七上
四)

●譬若如幻／譬若幻(聖)(七)(興)(四
一七上一二)

●誥／語(聖)(七)(興)(四一七中一二)

●将養／採養(聖)(興)／殊(↓採養
(七)(四一七下二二)

◎菩薩学／omit(聖)(七)(興)(四一八
上一三)

●分別菩薩／分菩薩(聖)(七)(興)(四
一八上一三)

●見／是(聖)(七)(興)(四一九上六)

●湊／奏(聖)(七)(興)(四一九上二〇)

●弘遠／弘達(聖)(七)(興)(四一九下
一四)

●劳悒／劳邑(聖)(七)(興)(四二〇上
二〇)

●離聞首／今／離聞今(初)／離聞今首
(聖)(七)(興)／離聞首今者(房)(四
二〇下一二)

●賜／瀦(聖)(七)(興)／歟(三)(宮)
(磧)(四二〇下一三)

●今／念(聖)(七)(興)(四二〇下一八)

【卷下】

●諸仏／諸德(聖)(七)(興)(四二一上
九)

●慌惚(三)(宮)(磧)／恍忽(聖)(七)
(興)／恍惚(房)／慌惚(初)／慌忽

(再)(四二一中二七)
 ●故／ornit(聖)(七)(興)(同右)
 ●未／来心／来心(聖)(七)(興)(四二二上二四)
 ●身命／身今(聖)(七)(興)(四二二中一三)
 ●衰入／襄入(聖)(七)(興)(四二二下一七)
 ●苦惱／苦慍(聖)(七)(興)(四二三中二三)
 ●無有実者／而無有実(聖)(七)(興)／無而有実(三)(宮)(磧)(四二三下二四)
 ●互／牙(聖)(七)(興)(四二四中二)
 ●五色／立色(聖)(七)(興)(四二四中二四)
 ●如仏者／如仏(聖)(七)(興)(四二六上一八)
 ●誠如／設如(聖)(七)(興)(四二五中二)
 ●茲／斯聖(七)(興)(四二五中一九)
 ●白仏言／白仏(聖)(七)(興)(四二五下二)

●決除疑網／決疑網(聖)(七)(興)／決於疑網(三)(宮)(磧)(四二五下一六)
 ●還／逮(聖)(七)(興)(四二五下二四)
 ●普照／並照(聖)(七)(興)(四二六中一四)
 ●分別知／分別如(聖)(七)(興)(四二六中二一)
 ●欣笑／笑欣(聖)(七)(興)(四二六中二六)
 ●虚空／空虚(聖)(七)(興)(四二六下一六)
 ●比之／此於(聖)(七)(興)(四二七上一五)
 ●超越彼／超越被(聖)(七)(興)(四二七中八)
 ●愛身／受身(聖)(七)(興)(四二七中三)
 ●將護／持護(聖)(七)(興)(四二七下七)
 ●阿須倫降／阿須降伏(聖)(七)(興)(四二七下九)
 ●諷誦誦／諷誦誦(聖)(七)(興)(四二

七下一七)
 ●衆難／衆艱(聖)(七)(興)(四二八上二)
 特に、◎印を施した四点については、顕著な異読や脱落であり、これらの三種が密に關係していることを示している。なかでも、◎印を施した最初の用例、十六文字もの脱落が他の二本とも共有されており、決定的ものである。唐からもたらされたとされる「唐經」に分類されている聖語藏經卷所収本は、他の二種の平安写本一切經より年代上先行し、それらの祖先 (ancestors) である可能性が想定されるが、その可能性をほぼ認めても問題ないと考える。
 興味深い異読としては、※印をつけたもので、日本古写經にのみ共有される異読「儵忽」が、慧琳音義所収の玄応撰『一切經音義』にみられる記述「儵忽」(大正藏五四卷五二〇中八)とかなり相似している。『玄応音義』にみられる表記、字体は、七世紀当時の長安写經の標準的なものを反映しているとされ、興味深い事例である。
 さらに、聖語藏經卷本と他の二種の平安写經の關係を探るために、聖語藏經卷にのみ確認できた異読についても確認しておく。
 ▽辭厭／亂厭(聖)(四〇七上一五)
 ▽一切群生／一群生(聖)(四一四中二三)
 ▽五逆罪／吾逆罪(聖)(四一四下六)
 ▽不増不減／不憎不減(聖)(四一五下二二)
 ◎眼淨／諸比丘得法眼淨(聖)(七)(興)／得法眼淨(明)(四二八上二四)
 ●無常輪故／無常故(聖)(四一八下一六)／一七)
 ▽交露帳／交路帳(聖)(四一九中二二)

●諸法眼淨／諸法眼淨(聖)(四二四) 二萬二千／二萬千(聖)(四二八上―上二四) 五)

▽遍察／遍察(聖)(四二五中八)

右記のうち、▽印を付したものについては、やや初歩的な過誤によるものとみられ、別本を参照せずとも訂正可能なものとみなせる。一方、他の異読については、別本を参照したりしないと訂正することが難しく、他の二種の日本古写経に連なるそれぞれの系統では、聖語藏経巻とは別系統の異本をどこかの段階で参照した可能性も考えられる。けれども、先に指摘したような十六文字もの長大な脱落はそのまま引き継がれているので、右の可能性はそれほど高いとは言えないかもしれない。

一方、七寺一切経、興聖寺一切経の二種の関係についてであるが、ここで掲げるのは控えるが、ともに単独の異読は相当数に上る。³⁹⁾それに対して、右の二本の間でのみ共有される異読はかなり限られる。これらのことから、現時点で、この両本、さらにその親や祖先となったものについてはそれほど近い関係にあったとは考えにくい。七寺一切経と興聖寺一切経の両本の、より具体的な関係については、現在入手できている他の日本古写経もあわせて調査した上で改めて検討したい。

第三節第二項 高麗藏の二種の特徴と関係

1 高麗藏の初雕本と再雕本の関係

同じ高麗大藏経の初雕本と再雕本であり、これら両本はひとつのグループに属することが当然ながら予想される。次に掲げるように、両者のみに共通

する異読が相当数確認でき、両者は伝承系統の上で一つのグループを形成していることが確かめられる。

【巻上】

●珂珍(初)(再)／奇珍(聖)(七)(興)

(房)／琦珍(三)(宮)(磧)(四〇八中

一六)

●謂／語(初)(再)(四〇九上一八)

※(以下の五箇所)「其翫習者即謂為

名：其翫習者即謂報応：其翫習者

即謂我所：其翫習者即謂慳貪：其

翫習者即謂犯戒」

(初)(再のみ「即」／on. (聖)(七)

(興)(房)／(三)(宮)(磧)ではいずれ

も「則」(四〇九上二四)

●謂／名(初)(再)(四一〇上一五)

●饌／饌(初)(再)(四一一上二〇)

●跏趺／加趺(初)(再)(四一二下二二)

●千輻相輪／千輻輪(初)(再)(四二二

【巻中】

●邪支(初)(再)／邪反(聖)(七)(興)

(房)／邪友(三)(宮)(磧)(四一四下

二六)

●享／亨(初)(再)／厚(宮)(四一五中

一二)

●其求塵勞者(初)(再)／其求塵勞

(聖)(七)(興)(房)／求塵勞者

(三)(宮)(磧)(四一六上六)

●普一城内／普城内外(初)(再)(四一

六中一四)

●卷合(初)(再)／苞合(聖)(興)(宋)／

苞合(七)(思溪藏Ⅱ中華藏の注記)／

包含(房)(宮)(磧)(元)(明)(四一七

下一五)

●不退輻輪／不退輪(初)(再)(四一八

中二四)

●国土／諸国土(初)(再)(四一八中二

八)

【巻下】

●存／在(初)(再)(四一九上二六)

●途路(初)(再)／徑路(聖)(七)(興)

(房)／塗路(三)(宮)(磧)(四一九中

一九)

●遍有(初)(再)／變有(聖)(七)(興)

- (房)／皆有(三)(宮)(磧)(四一九中
二二)
●満其池／盈満池(初)(再)(四一九中
二七)
●鬼神変(初)(再)／鬼神現(聖)(七)
(興)(房)／神鬼現(三)(宮)(磧)(四
二〇上二八)
●虚無(初)(再)／虚無(聖)(七)(興)／
處住(房)／虚空(三)(宮)(磧)(四二
〇下二八)
●灰／焰(初)(再)(四二二上二三)
●決也／決了(初)(再)(四二一中三)
●燦徊(初)(再)／焰煙(聖)(七)(房)／
焰燦(興)／焰迴(三)(宮)(磧)(四二
六中八)
●無数人／無量人(初)(再)(四二七
中二八)
●斯典／斯經典(初)(再)(四二八上六)

一方、高麗蔵の初雕本は開宝蔵を底本としたということはほぼ定説として認められているが、高麗蔵の再雕本の底本については、開宝蔵あるいは高麗蔵初雕本とされ、経巻によっても異なる可能性が指摘されてきた⁴⁰。そこで、本稿で扱う『普超三昧経』には、幸いにして高麗蔵初雕本も現存するので、それと再雕本の関係をより明確にすることで、同経については、高麗蔵再雕本が開宝蔵にもとづいたものか、あるいは初雕本によったものかについて確認する。言いかえると、高麗蔵の初雕本と再雕本について、開宝蔵を親とする兄弟関係にあるのか、初雕本を親とする親子関係にあるのかについて探る。まず、初雕本の巻上第十四紙の九行目には、次のように、他本にはみられないような独特の改段が確認できる。くわえて、一紙の行数も通常より一行多い二十四行である(次ページ図1参照)。さらに、その直前の巻上第十三紙の九行目から第十四紙の十四行目までは、初雕本と再雕本で改行位置が一致しない部分が続く(次ページ図2参照)。

右の事象は先に掲げた初雕本と再雕本にのみ共通した異読の用例で、※印をつけたものと関連する。すなわち、再雕本では、他本にみられない「即」の文字が見られる行はいずれも十五字(通常は一行十四字)になっている(次ページ図3参照)。一方、初雕本では、第十三紙九行目以降の部分は、再雕本とは改行箇所が一致せず、再雕本と同様に他本にはない「即」の五字がみられる。続く第十四紙九行目に他本にはみられない改段箇所が設けられ、さらに同第十四紙では通常一紙二十三行になるところが、二十四行となってしまうと推定できる。以上のような、巻上の第十三紙より第十四紙に見られる、初雕本と再雕本の相違点、不一致は、両者が親子関係ではなく、開宝蔵を親とする兄弟関係であることを示している。

さらに、初雕本には改版の痕跡とみられる、行あたりの文字数が通常の十四字を逸脱している箇所がいくらか確認できる。これらは開宝蔵のものをそのまま受け継いだ可能性は残るものの、高麗蔵初雕本は単純に開宝蔵を覆刻したものではなく、改版したものである可能性も考えてもよいように思われる。

2 再雕本における改訂について

第一節でも述べたように、再雕本はその制作にあたって契丹蔵や江南諸蔵、国内にあった写本などを用いて校訂作業を行ったことが知られ、守其による『校正別録』三十巻も残されている。右のように、『普超三昧経』については、高麗蔵再雕本は初雕版を底本としたのではなく、開宝蔵にもとづいたとみられるが、次に掲げるように、契丹蔵にもとづく房山石経本との間にのみ共有される異読が一定数確認でき、『普超三昧経』でも契丹蔵が高麗蔵再雕本の

一行十三文字（通常は十四文字）

1 慢其翫習者謂世俗法若遵修者謂
2 度世法而不想慢其翫習者謂有為
3 法若遵修者謂無為法而不想慢其
4 翫習者謂為罪者遵修者謂無罪法
5 而不想慢其翫習者謂諸漏若遵修
6 者則謂無漏而不想慢是謂翫習至
7 於遵修離諸所見不著不斷菩薩旨
8 趣則應大衆諸通慧矣
9 又次仁者而不得至於諸通慧何
10 故不至以何等至諸通敏慧諸通
11 慧者離諸所作其諸通慧亦無所
12 至亦無有逮諸通慧者又諸通慧亦
13 無色像亦無痛痒思想生死識之形
14 貌也其諸通慧者亦無法則亦無非
15 法其諸通慧亦無有施所以者何謂
16 通慧者則為施與又諸通慧無有持
17 戒忍辱精進一心智慧所以者何諸
18 通慧者則自然聖諸通慧者無去來
19 今所以者何其諸通慧超度三世諸
20 通慧者無眼耳鼻口身心識所以者
21 何度諸界故諸仁欲知諸通慧者若
22 有菩薩欲得通慧住如通慧當云何
23 住於一切法而無所住斯則為住於
24 諸通慧一切諸法皆非我所斯諸通
通常とは異なる二十四行目

再雕本とは改行箇所が一致しない部分

初雕本にのみ見られる改段箇所

図1 高麗大蔵經初雕本『普超三昧經』卷上第十四紙（『高麗大蔵經初刻本輯刊』より）

日本古写一切經3種および房山石經では確認できない「即」の5字

崇八法之行則應大衆諸通慧矣
於是軟首語諸正士及天子曰仁者
欲知菩薩精進若不精進至諸通慧
所以者何其翫習者行在三界若
遵修者謂諸住見是謂為內亦不
翫習是謂為外其翫習者謂聲聞地
若遵修者謂緣覺地其翫習者謂在
衆結所行勤勞若遵修者則謂所著
凡夫之法其翫習者即謂為名若遵
修者則謂為色其翫習者即謂報應
若遵修者則謂所見其翫習者謂有
所著若遵修者則謂有所得其翫習
者即謂我所著遵修者則謂吾身其
翫習者即謂慳貪若遵修者則謂布
施而不想慢其翫習者即謂犯戒若
遵修者則謂持戒而不想慢其翫習
者謂瞋怒若遵修者則謂忍辱而不
想慢其翫習者謂慳怠若遵修者則
謂精進而不想慢其翫習者謂亂意
若遵修者則謂一心而不想慢其翫
習者謂愚癡若遵修者則謂智慧而
不想慢其翫習者謂不善本若遵修
者謂等善本而不想慢其翫習者謂

再雕本とは改行箇所が異なる部分

図2 高麗大蔵經初雕本『普超三昧經』卷上第十三紙（『高麗大蔵經初刻本輯刊』より）

崇八法之行則應大衆諸通慧矣
於是軟首語諸正士及天子曰仁者
欲知菩薩精進若不精進至諸通慧
所以者何其翫習者行在三界若遵修
者謂諸住見其翫習者是謂為內亦不
翫習是謂為外其翫習者謂聲聞地
若遵修者謂緣覺地其翫習者謂在
衆結所行勤勞若遵修者則謂所著
凡夫之法其翫習者即謂為名若遵修
者則謂為色其翫習者即謂報應若遵
修者則謂所見其翫習者謂有所著
若遵修者則謂有所得其翫習者即謂
我所著遵修者則謂吾身其翫習者
即謂慳貪若遵修者則謂布施而不想
慢其翫習者即謂犯戒若遵修者則謂
持戒而不想慢其翫習者謂瞋怒若
遵修者則謂忍辱而不想慢其翫習
者謂慳怠若遵修者則謂精進而不
想慢其翫習者謂亂意若遵修者則
謂一心而不想慢其翫習者謂愚癡
若遵修者則謂智慧而不想慢其翫
習者謂不善本若遵修者謂等善本
而不想慢其翫習者謂無福報若遵

※は一行十五文字（通常は十四文字）

図3 高麗大蔵經再雕本『普超三昧經』卷上第十三紙（東国大学校発行の影印版『高麗大蔵經』より）

校訂作業に用いられたことを示唆する。

【巻上】

※無難鎧無罣礙鎧(再)／無難鎧無罣礙鎧(房)／無罣礙鎧(初)／無罣礙鎧(聖)(七)(興)／無罣礙鎧(三)(宮)

(磧)(四〇七中八)

●言辭／言詞(再)(房)(四一〇上二一)

●儻放／便放(再)(房)(四二二上三)

【巻中】

●制江波／湍江波(再)(房)(四一四上六)

●吾身願／吾誓願(再)(房)(四一四上一四)

一四

●嬉遊(再)(房)／熙遊(初)／熙遊(聖)(七)(興)(三)(宮)(磧)(四一五上一五)

一五

特に※印をつけた用例は再雕本にみられる読み「無難鎧無罣礙鎧」は、ちようど初雕本の「無難鎧」と房山石経の「無難鎧無罣礙鎧」の双方を参照したようなかたちの読みである。ちなみに、房山石経と高麗蔵の二種で一致しない部分「無罣礙鎧」という読みは、日本古写経の三種の読みと重なる。

次に、一行十四字を通例とする版式から逸脱し、再雕本がその底本を訂正した部分と推測できる箇所が次のように数多く確認できる。^④

【巻上】(六例)

●(再)第九紙五行目…十五字／(初)omit「更」

●(再)第一〇紙九行目…十五字／(初)omit「雖」

●(再)第一三紙四～五行目…十五字／(初)四～五行目…十三字 omit「其翫習者」

●(再)第一三紙九、一〇、一一、一四、一五行目…十五字／(聖)(七)(興)omit「即」(＝五回)／(三)(宮)(磧)はいずれも「則」

●(再)第二二紙一六行目…十五字／(初)omit「界」

●(再)第二三紙八行目…十五字／(初)omit「所」

【巻中】(二〇例)

●(再)第一紙七行目…十五字「正真道意志願」／(初)「正真道意願」／(他本)「正真道志願」

●(再)第四紙一三行目…十五字／(初)omit「之」

●(再)第四紙一三行目…十五字／

(初)omit「後」

●(再)第八紙一行目…十三字「昼夜」／(初)(聖)(七)(興)「昼夜之」

●(再)第八紙一二行目…十五字／(初)omit「有」

●(再)第一一紙一四行目…十五字／(初)omit「在」

●(再)第一二紙六～七行目…十六字＋十五字(以降、初雕本とは一行ずれ)／(初)omit「於一切法而無所行乃為道行於一切法亦」(十七字)

●(再)第一三紙三行目…十五字／(初)omit「当」

●(再)第一七紙九行目…十五字／(初)omit「如」

●(再)第二〇紙七行目…十五字／(初)omit「護」

●(再)第二二紙二行目…十五字／(初)omit「得」

●(再)第二二紙一二～一四行目…十五字×三行／(初)一六字＋十五字／(聖)(七)(興)omit「菩薩学」

●(再)第二三紙一行目…十五字／

- (初)omit「諸」
- (再)第二四紙二三行目：十五字／
(初)(聖)(七)(興)omit「是」
- (再)第二六紙三行目：十五字／
(初)omit「諸」
- (再)第二六紙一二行目：十五字／
(初)omit「以」
- (再)第二七紙三行目：十三字「無極広施」／(初)(聖)(七)(興)「無極広之施」
- (再)第三二紙九行目：十五字／
(初)omit「諸」
- (再)第三二紙二一～二二行目：十五字×二行／(初)(聖)(七)(興)omit「常名」
- (再)第三三紙四行目：十五字「香著諸」＝(房)／(初)(聖)(七)(興)「著諸」／(宋)「諸著」／(他本)「諸香」
- 【卷下】(二三例)
- (再)第一紙二二～二四行目、第二紙一～二行目：十五字×四行／
(初)(聖)(七)(興)omit「無有行者」
-
- (再)第二紙二三行目：十五字／
(初)(聖)(七)(興)omit「帰」
- (再)第三紙一二行目：十五字／
(初)(聖)(七)(興)omit「無」
- (再)第三紙一七行目：十五字／
(初)(三)(宮)(磧)omit「故」
- (再)第三紙一八行目：十五字＝
(初)／(聖)(七)(興)omit「故」
- (再)第四紙七行目：十五字／(初)omit「所」
- (再)第四紙一一～一四行目：十五字×四行／(初)omit「無所造者」
- (再)第四紙二三行目：十三字「耳」／(初)「眼耳」
- (再)第七紙一五行目：十五字／
(初)omit「於」
- (再)第九紙六行目：十五字／(初)omit「徒」
- (再)第一〇紙五～六行目：十五字×二行／(初)(聖)(七)(興)omit「以衣」
- (再)第一二紙二三行目：十五字／
(初)omit「有」
-
- (再)第一二紙一五行目：十五字／
(初)(聖)(七)(興)omit「無」
- (再)第一二紙一七行目：十五字／
(初)omit「有」
- (再)第一二紙二〇行目：十五字／
(初)(聖)(七)(興)omit「者」
- (再)第一三紙一二行目：十五字／
(初)(聖)(七)(興)omit「所」
- (再)第一三紙一四行目：十五字／
(初)omit「所」
- (再)第一五紙三行目：十五字／
(初)omit「数」
- (再)第一六紙八行目：十五字／
(初)omit「化」
- (再)第一八紙一四行目：十五字／
(初)omit「察」
- (再)第二〇紙四行目：十五字／
(初)omit「於」
- (再)第二二紙四行目：十五字／
(初)omit「人」
- (再)第二二紙二三行目：十五字＝
(初)／(聖)(七)(興)omit「言」
-
- (再)第二四紙七行目：十五字＝
(初)／(聖)(七)(興)omit「者」
- (再)第二五紙二二行目：十三字「寧見」／(初)(聖)(七)(興)「寧見有」
- (再)第二七紙二三行目：十五字／
(初)omit「当」
- (再)第二八紙三行目：十五字／
(初)omit「仏」
- (再)第二八紙一二行目：十三字／
(初)「汝汝」
- (再)第二八紙二二行目：十五字／
(初)(聖)(七)(興)omit「乃」
- (再)第二九紙一四行目：十三字「経」／(初)「法経」
- (再)第三二紙一五行目：十三字「而」／(初)「而在」
- (再)第三三紙五行目：十三字「精修」／(初)二行目 omit「面」+五行目(初)(聖)(七)(興)「精進修道」

ほとんどの場合、初雕本のみでの単独の異読か、初雕本と日本古写経三種

に共有される異読かのいずれかが確認できる。

一方、巻上での用例が他に比べて少ないことも注目に値する。これは後に検討する事柄と関わる。

以上、本項で検討した、『普超三昧経』の高麗蔵の初雕本と再雕本の関係についてまとめると次のとおりである。

- 初雕本と再雕本はともに開宝蔵を底本としたものであり、兄弟関係にあるとみられる。
- 初雕本にも改版の痕跡が見られ、同本は開宝蔵の単なる覆刻ではない可能性がある。
- 再雕本の改訂に際して契丹蔵が用いられたことが、房山石経と再雕本のみの間で共有される異読が一定数確認できたことから裏付けられる。
- 再雕本にみられる改版の痕跡とみられる箇所は相当数確認できるが、巻上では他の二巻に比べて少ない。

第三節第三項 三巻本構成の諸本の相互関係——主に異読の共有関係から

前項までの検討により、三巻本構成である六種については、諸本の来歴から予想されるように、日本古写経三種、高麗蔵の二種、そして契丹蔵に由来する房山石経の、三グループに分かれることが異読の共有関係などから確かめられ、それぞれのグループ内での諸本の関係についても検討した。

本項では、主に三巻本がみられる諸本のグループ三つの相互関係について、同じく異読の共有関係から探ることを試みる。

1 日本古写経の三種と高麗蔵初雕本

まず、顕著な異読の共有関係が確認されたものとして、日本古写経の三種と高麗蔵初雕本で共有される異読を確認する。

【巻上】（二例）

- 蜜搏／蜜揣（初）（聖）（七）（興）／蜜搏（宋）（磧）（四二二下五）

【巻中】（二六例）

- 疇匹（宋）（宮）（磧）／儔匹（元）（明）／疇迕（初）（聖）（興）／疇返（↓迕）（七）（四一四下二四～二五）
- 昼夜／昼夜之（初）（聖）（七）（興）（四一五上二六）
- △ 扶接／快接（初）（聖）（七）（興）（四一五上二九）
- △ 道耳／道身（初）（聖）（七）（興）（四一六上五）
- 精覈／精核（初）（聖）（七）／精校（興）（四一六下一一）
- 義／宜（初）（聖）（七）（興）（四一六下二二）
- 者所說法（初）（聖）（七）（興）／有所說法（三）（宮）（磧）／諸所說法（再）（房）（四一八上八～九）

△ 所遊／遊所（初）（聖）（七）（興）（四一八中五）

△ 而無／無而（初）（聖）（七）（興）（四一八下二）

△ 是故／故（初）（聖）（七）（興）（四一八下二三）

● 縁起／縁趣（初）（聖）（七）（興）（四一九上五）

● 無極広之施（初）（聖）（七）（興）／無極広施（再）（房）／無極之施（三）（宮）（磧）（四一九中六）

△ 皆有／階有（初）（聖）（七）（興）（四一九中二三）

● 包容／苞容（初）（聖）（七）（興）（四二〇中四）

△ 名常名聞／名聞（初）（聖）（七）（興）（四二〇下二）

● 齋香著諸菩薩（再）（房）／齋著諸菩薩（初）（聖）（七）（興）／齋諸菩薩（宋）（宮）（磧）（元）（明）／齋諸菩薩（宋）

(四二〇下七)

【巻下】(二〇例)

△無有行者／omit(初)(聖)(七)(興)
(四二一上二一)

△無歸趣／無趣(初)(聖)(七)(興)(四
二二中二二)

△無欺妄／欺妄(初)(聖)(七)(興)(四
二二中二三)

△度塵／塵度(初)(聖)(七)(興)(四二
二中二八)

△以衣著其身上／著其身上(初)(聖)
(七)(興)(四二三上六)

△無所見／所見(初)(聖)(七)(興)(四
二二三中二四)

△衆会者／衆会(初)(聖)(七)(興)(四
二二三中二八)

△目前／前目(初)(聖)(七)(興)(四二
三下六)

△察見／見察(初)(聖)(七)(興)(四二
三下二一)

△無所得／無得(初)(聖)(七)(興)(四

これら、本古写經の三種と高麗藏初雕本の間でのみ共有される異読について、それらの性格付けをすることが難しいものも含むけれども、△印を付し

二三下二二)

●奉遵／奉尊(初)(聖)(七)(興)(四二
四中二一)

●明智／明知(初)(聖)(七)(興)(四二
四下三)

●吾我／吾身(初)(聖)(七)(興)(四二
四下五)

△受法教／天法教(初)(聖)(七)(興)
(四二五上二七、二八)

△黎元／黎光(初)(聖)(七)(興)(四二
六中二五)

●寧見／寧見有(初)(聖)(七)(興)(四
二六中二七)

△得為／為(初)(聖)(七)(興)／得法
(宋)(四二六下五)

△乃／omit(初)(聖)(七)(興)(四二七
上二六)

△怨敵／然敵(初)(聖)(七)(興)(四二
七下二二)

●精修／精進修道(初)(聖)(七)(興)
(四二八上二一)

たものについては、過誤(エラー)によるものとみられる。それらにより、これらの諸本が伝承系統においてかなり近接していることを示唆する。

興味深いのは、管見の限り、巻上では有意なものは一例しか確認できなかったのに対し、巻中および巻下では、右のとおり、相当数が確認できた。このことから、少なくとも、巻中および巻下に関する限り、日本古写經の三種と高麗藏初雕本はかなり近い関係にあると見ることができ。すなわち、日本古写經三種のうち、他の二種の祖(ancestor)に位置付けられる、聖語藏經卷所収本で「唐經」とされるものと、高麗藏初雕本およびその親である開宝藏が伝承系統上かなり近い、とも言い換えることができる。

一方、巻上については、右の兩者、日本古写經の三種と高麗藏初雕本の間には明確な近接関係を見出すことは難しく、巻中および巻下と同様の伝承系統を想定することは難しい。これについては、日本古写經三種のなかでも最も古い聖語藏經卷、ならびに高麗藏初雕本およびその親とされる開宝藏の兩者のいずれか、あるいはその両方について、巻上と他の二巻が、異なった来歴を有する可能性が考えられるだろう。この点に関連して、次では『普超三昧經』諸本でのMañjuśrīに相当する訳語について確認する。

2 Mañjuśrīに相当する訳語

こゝでは、Mañjuśrīに相当する訳語が『普超三昧經』の諸本間あるいは同じ資料の中でも、巻によって異なることについて確認し、右でみたように、巻によって伝承系統が異なる可能性との関連について検討する。

『普超三昧經』諸本に見られる、Mañjuśrīに相当する訳語は次のとおりである。

表2 『普超三昧經』諸本にみられる Mañjuśrī の訳語の相違

Mañjuśrī の訳語	再雕本の巻	高麗蔵再雕本以外の他本	多典籍での引用文中
軟首	卷上	(初)「上記の卷上のみ」 (宋)(宮)	
濡首	卷中	(聖)(七)(興)「以上三種の卷上のみ」(房)(磧)(元)(明)	『妙法蓮華經文句』 『宗鏡録』
溥首	卷下	(聖)(七)(興)「以上三種の卷中と卷下」	『経律異相』

まず、高麗蔵再雕本では各巻で Mañjuśrī に相当する訳語が異なることが確認される。すでに何度か言及しているように、同本ではその開板に際して他本を用いて校訂作業がなされたことが知られ、さらに再雕本の冒頭にのみ「軟首或作濡首、或作溥首」という注記が見えることから、この事象もおそらく再雕本作成の際の改訂によるものとみることができるといえる。

次に、日本古写経三種の巻上では「濡首」とするの、巻中および巻下では「溥首」とする。これは日本古写経三種の祖と目される聖語蔵経巻に由来するが、これは同本において巻上とそれ以外の来歴が異なるものである可能性を示唆する。

一方、高麗蔵初雕本では、巻上でのみ、Mañjuśrī に相当する訳語が「軟首」で統一されているのに対して、巻中および巻下では訳語が統一されておらず、ここに掲げた三種の訳語に「熨首」を加えた四種の訳語が不規則に現れる。このことは高麗蔵初雕本およびその元になった開宝蔵についても、巻上とそれ以外の巻の来歴が異なっていた可能性を示唆する。また、先の第三節第二項で指摘したように、再雕本における改変の痕跡が、巻上では他の巻よ

りも比較的少ないことも関連していると思われる。

ちなみに、江南諸蔵でも、宋代の思溪蔵と福州版では「軟首」とするの、他本では「濡首」とする。一方、南朝・梁において編纂されたとみられる『経律異相』では「溥首」となっていて、江南諸蔵とは異なる訳語がみられる。^④

以上のように、Mañjuśrī に相当する訳語の相違に注目すると、日本古写経三種の祖とみられる聖語蔵経巻、および高麗蔵初雕本（ならびにその底本の開宝蔵）のいずれについても、巻上とそれ以外の巻中・下の来歴・背景が異なる可能性が窺える。これに関しては第四節で再度検討したい。

3 高麗蔵の二種と房山石経（契丹蔵）

続いて、日本古写経三種と房山石経、および高麗蔵の二種と房山石経のそれぞれでのみ共有される異読について確認する。結論を先取りしておくとして、いずれの場合も伝承系統において明確な近接関係を指摘できるほどの、有意な異読の共有関係はみられず、むしろ先にみた日本古写経三種と高麗蔵初雕本における巻中および下での近接関係が強調される結果となった。

まず、高麗蔵の二種と房山石経の間でのみ共有される異読は次のとおりである。仮にこれらのみを見るならば、高麗蔵二種の親である開宝蔵と房山石経がもとづいた契丹蔵の関係は近いとも言えるかもしれないが、先の日本古写経三種と高麗蔵初雕本の間での異読の共有関係を踏まえると、それらよりは遠いと判断せざるを得ない。

【巻上】

●除棄(初)(再)(房)／降棄(聖)(七) — (興)(三)(宮)(磧)(四〇七下二七) ●及(初)(再)(房)／omit(聖)(七)

(興)(三)(磧)(四〇八上二九)

●諸群黎(初)(再)(房)／衆群黎(聖)

(七)(興)(三)(宮)(磧)(四〇八中二一)

●議告(初)(再)(房)／告議(興)(三)

(宮)(磧)／古議(聖)(七)(四〇八下一六)

●会同(初)(再)(房)／合同(聖)(七)

(興)(三)(宮)(磧)(四一〇下二)

●告白(初)(再)(房)／造白(聖)(七)

(興)(三)(宮)(磧)(四一一中二〇)

●已畢(初)(再)(房)／占畢(聖)(興)

(三)(宮)(磧)／古↓占畢(七)(四一二中二〇)

【卷中】

●志懷(初)(再)(房)／悉懷(聖)(七)

(興)(三)(宮)(磧)(四一九下二六)

●經典(初)(再)(房)／經要(聖)(七)

(興)(三)(宮)(磧)(四二五下二八)

【卷下】

●欲索(初)(再)(房)／愛欲(聖)(七)

(興)(三)(磧)／受欲(宮)(四二三中三)

●善哉善哉(初)(再)(房)／善哉善男

子(聖)(七)(興)(三)(宮)(磧)(四二四中一五)

●宣講(初)(再)(房)／宣讚(聖)(七)

(興)(三)(宮)(磧)(四二五下二五)

●皆限(初)(再)(房)／賢限(聖)(七)

(興)(三)(宮)(磧)(四二六中六)

●洹河沙(初)(再)(房)／江河沙(聖)

(七)(興)(三)(宮)(磧)(四二六中二〇)

●經典(初)(再)(房)／典(聖)(七)(興)

(三)(宮)(磧)(四二八上六)

●至湊(初)(再)(三)(磧)／至処(聖)

(七)(興)(房)(四一〇中一〇)

●本無(初)(再)(三)(磧)／本源(聖)

(七)(興)(房)(四一〇下二五)

【卷中】

△邪反(聖)(七)(興)(房)／邪支(初)

(再)／邪友(三)(宮)(磧)(四一四下二六)

●者則為道(初)(再)(三)(磧)／則為

道(聖)(七)(興)(房)(四一六上六)

△徑路(聖)(七)(興)(房)／途路(初)

(再)／塗路(三)(宮)(磧)(四一九中一九)

△鬼神現(聖)(七)(興)(房)／鬼神變

△を施した用例については、別の異読が江南諸藏のみかつ高麗藏二種のみ

にみられるものであり、それらの方に意義を見出すべき用例とも言える。そ

れらを加味して判断すると、日本古写経三種の祖に位置する聖語藏経卷と房

山石経がもとづいた契丹藏については積極的な近接性は見出すことは難しい。

第四節 まとめにかえて——『普超三昧経』諸本の伝承系統に関する

4 日本古写経三種と房山石経(契丹藏)

次に日本古写経三種と房山石経のみで共有される異読を掲げる。

【卷上】

△奇珍(聖)(七)(興)(房)／珂珍(初)

(再)／琦珍(三)(宮)(磧)(四〇八中一六)

(初)(再)／神鬼現(三)(宮)(磧)(四二〇上一八)

●金毗(聖)(七)(興)(房)／金毗(初)

(再)(宋)(宮)／金鉏(磧)(元)(明)

(四二〇上一八)

【卷下】

●不遽(聖)(七)(興)(房)／不劇(初)

(再)(三)(磧)／不懾(宮)(四二六下一三)

【卷中】

●荊(初)(再)(三)(磧)／別(聖)(七)

(興)(房)(四二六下二二)

●洗除(初)(再)(三)(磧)／沈吟(聖)

(七)(興)(房)(宮)(四二七下一九)

『經』諸本の伝承系統に関する系統図を描くことを試みたい。ただし、後でも述べるように、現在筆者の手元にありながらも、現時点で調査を行っていないものが数種類残り、これらについては近い将来に調査を行う予定であるので、本節で掲げる系統図は現時点における暫定的なものとなることを予め断っておく。

まず、三卷本と四卷本の伝承系統上の関係について、改めて検討しておく。第二節で確認したように、異読の共有関係から、江南諸蔵所収の四卷本は他本にみる三卷本とは異なる系統に属することは明白である。一方、経録類の記録、特に最古の経録である『出三蔵記集』の記述からは、四卷本は六世紀はじめの南朝・梁において流布し、三卷本も別本として併存していたと考えられる。すなわち、それ以前の六世紀よりも前に、三卷本と四卷本の伝承系統は分かれていたと推測できる。

一方、今回検討した三卷本でもっとも古いものは聖語蔵経卷所収本であり、早くとも六世紀後半の書写、「唐経」として分類されていることを考えれば、およそ七世紀から八世紀にかけての書写とみられる。すなわち、六世紀より前に、三卷本と四卷本が分岐したよりもあとの書写であり、日本で十二世紀に書写された写本一切経はその系統を受けている。他の三卷本についても、いずれも十世紀以降に開板された版本であり、三卷本と四卷本の分岐よりも確実に遅れるとみられる。

次に、三卷本のかたちをとる諸本六種の相互関係であるが、これは諸本の来歴からも予想されるように、日本古写経三種と高麗蔵二種、房山石経の三つのグループに分かれることが、異読の共有関係からも確かめられた。

各グループ内部の関係については、日本古写経三種の中で最も古い聖語蔵

経卷の「唐経」に分類されるものが他の二種の祖先にあたるとみられる。また、高麗蔵の二種はともに開宝蔵を底本とするが、再雕本は契丹蔵などから影響を受けるかたちで改訂がなされていることが異読の共有関係からも確かめられた。

そして、三卷本のかたちをとる右の三グループの相互関係については、異読の共有関係から、日本古写経三種と高麗蔵初雕本の間で、卷中および卷下に関しては顕著な近接関係が確認できたものの、卷上については、そのような近接関係をみとめることはできない。同時に、両者の卷中・下で共有される異読については、過誤によるとみられるものを数多く含むことから、その近接関係はかなり近いとみられる。さらに、他のグループ同士で共有される異読について確認したものの、日本古写経三種と高麗蔵初雕本の間にも近接関係に並ぶような、顕著なものとは他のグループ間では確認できなかった。

また、*Manjusri*の訳語の相違に注目すると、日本古写経三種および高麗蔵初雕本ともに、卷上と卷中・下の間で来歴が異なる可能性が考えられる。

以上のような、本稿での調査結果を勘案して考える可能性のひとつとしては、開宝蔵がもつた写本形態のものと聖語蔵経卷のものが伝承系統の上ではかなり近い関係にあったけれども、開宝蔵の開板あるいは補修などの段階、あるいは写本形態の段階で、卷上のみが改訂を受けた、ということが考えられる。特に、高麗蔵初雕本では、卷上でのみ、*Manjusri*の訳語が「軟首」に統一されていること、および、同再雕本では卷上での訂正痕が他の巻に比べて少ないことがその可能性を支持する。そして、卷中・下で示すような、日本古写経三種と高麗蔵初雕本のみが共有していたような異読については、初雕本の卷上では、おそらく、房山石経がもつた契丹蔵と近い

系統に属する別本を参照して訂正された、と推測できる。⁴³⁾

もう一つの可能性としては、聖語藏経卷の卷上と卷中・下、あるいはそれらの祖がもともとは別々に流布していたものが、ある段階で一つとされ、そのうち、卷中・下のみが開宝藏およびそのもとなった写本一切経と近い関係にあったということも考えられる。このことを支持するのは、聖語藏経卷および他の日本古写経において、Mañjuśrīの訳語が卷上と卷中・下の間で異なることである。しかしながら、それ以外にこの可能性を支持する要素や現象が現時点では見当たらず、前者よりも可能性は低いと考えられる。

現時点で考えうる右のような二種の可能性については、両者は相反するものではなく、ともに起こりうるものでもあるけれども、両者のうち、前者の方がやや蓋然性が高いと考える。それにもとづく『普超三昧経』諸本に関する暫定的な伝承系統図を掲げると次のとおりとなる(図4)。

いずれの可能性にしても、『普超三昧経』の卷中と卷下に限ってみたとき、聖語藏経卷と開宝藏もしくはそれらの祖本がかなり近い系統にあることは間違いないさそうである。聖語藏経卷およびその系統を受けたであろう日本古写一切経に含まれる各典籍の来歴、背景にも様々なものが考えられ、今後も調査を進めていく必要があるように思う。⁴⁴⁾

今後の課題としては、すでに第一節でも触れてきたように、現在筆者の手元にある諸資料について調査を進める予定である。日本古写経については、高野山金剛峯寺所蔵の中尊寺一切経金銀交書写本および石山寺一切経について調査を行い、今回調査した他の日本古写一切経との具体的な関係を明らかにすることを試みる。版本大藏経については、江南諸蔵のうち、増上寺所蔵の思溪蔵と普寧寺蔵、および東京大学総合図書館所蔵の嘉興蔵(万暦版)に

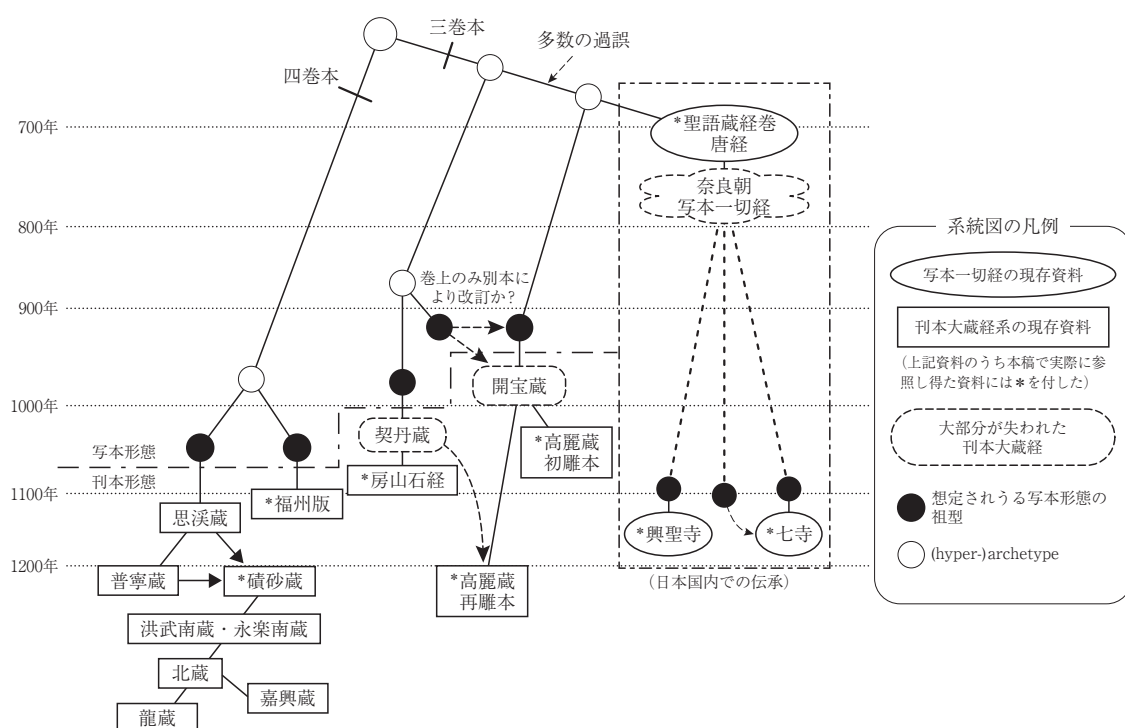


図4 『普超三昧経』の写本・版本大藏経の伝承系統図(暫定案)

ついで調査を進め、今回は明らかにできなかった江南諸蔵の関係についても見直していきたい。

以上のような諸本について調査をさらに進めることで、本稿で暫定的なものとして掲げた『普超三昧経』諸本の伝承系統についてより詳細に考察を加えて見直すとともに、将来的には諸本を校合した『普超三昧経』の校本を提示することができればと考える。

註

- (1) 〈阿闍世王経〉の現存諸本については、拙著『阿闍世王経の研究―その編纂過程の解明を中心として』（山喜房佛書林、二〇一二年）一頁以下参照。また、近年発見された同経梵本の抄本については、加納和雄『阿闍世王経』抄本の梵文写本（『印度学仏教学研究』六四卷三号、二〇一五年）参照。
- (2) 竺法護の翻訳活動については河野訓『初期漢訳仏典の研究―竺法護を中心として』（皇學館大学出版部、二〇〇六年）および Daniel Boucher “Dharmaraksas and the Transmission of Buddhism to China” (*Asia Major*, THIRD SERIES, Vol. 19, No. 1/2, 2006) に詳しい。
- (3) 大正新脩大蔵経の編纂にあたって、先行する大日本校訂大蔵経（縮蔵）が大きな役割を果たしたことは、船山徹『漢語仏典―その初期の成立状況をめぐって』（『漢籍はおもしろい』（京大人文研漢籍セミナー）、二〇〇八年）などに詳しい。
- (4) 経録類における記述については本稿第二節第二項参照。特に『開元釈教録』には「或上加「文殊師利」字」という文言が確認できる。
- (5) 『普超三昧経』では全体で十三品に分節されているが、これは〈阿闍世王経〉の他本にはみられない特徴であるから、訳者の竺法護が独自に章（品）を設けた可能性が高い、と考える（前掲拙著参照）。三巻本、四巻本とも、次のように、品の切れ目で巻が分かれる。

●【三巻本】巻上…第三品まで、巻中…第九品まで、巻三…第十三品まで

●【四巻本】巻第一…第三品まで、巻第二…第八品まで、巻第三…第十品まで、巻第四…第十三品まで

三巻本の巻上および四巻本の巻第一の範囲は一致するが、他巻の切れ目は異なる。それ以降の巻では基本的に、四巻本のほうが一卷あたりの長さは短い。

(6) 聖語蔵経巻に残された奈良朝写経の大部分を占めるのは、光明皇后発願「五月一日経」および称徳天皇発願「神護景雲二年御願経」とみられていたけれども、後者については願文をそなえる四巻以外については、別の奈良朝一切経で、宝龜年間に書写されたとされる「今更一部一切経」とみられることが最近明らかにされている。飯田剛彦「聖語蔵経巻「神護景雲二年御願経」について」（『正倉院紀要』三四号、二〇一二年）参照。

(7) 赤尾栄慶「聖語蔵経巻管見―調査報告にかえて」（『正倉院紀要』三二号、二〇一〇年）参照。

(8) 「東大寺印」については、田中史生「東大寺印」と「造東寺印」―正倉院文書の分析から（『国立歴史民俗博物館研究報告』七九、一九九九年）参照。

(9) 七寺一切経については、七寺一切経保存会編『尾張史料 七寺一切経目録』（七寺一切経保存会、一九六八年）や牧田諦亮監修・落合俊典編『七寺古逸経典研究叢書』などを参照。

(10) 「日本古写経データベース」(<http://www.icabs.ac.jp/research/koshakyō>)

(11) 昨年度二〇一七年度に口頭研究発表を行なった際には、落合先生より、この「勝本」という表記について、「法勝寺本」を指す可能性は考えられないのか、という指摘を受け、筆者自身もその可能性を考えた。しかしながら、もしそうであるならば、そのように明記する可能性が高いと考えられるので、ここでは普通名詞と考えて「優れた（別）本」という意味で解釈する。七寺一切経の書写にあたって、法勝寺に所蔵された一切経の一部が利用されたことに関しては、落合俊典「平安時代における入蔵録と章疏目録について」（落合俊典編『中國・日本經典章疏目録』（七寺古逸経典研究叢書 第六巻）、大東出版社、一九九八年）参照。

- (12) 興聖寺一切経については、京都府教育委員会編『興聖寺一切経調査報告書』（京都府古文書調査報告書第一三集、京都府教育委員会、一九九八年）所収の報告書、諸論文に詳しい。
- (13) 前掲報告書、一〇六頁参照。
- (14) 中尊寺金銀交書一切経（国宝）については、現在、高野山霊宝館で管理、所蔵されているが、それを全巻フィルム撮影されたものが京都国立博物館にて管理されている。幸いにして、所蔵者の高野山金剛峯寺より高野山霊宝館をおして複写利用の許可をいただき、京都国立博物館にもご協力いただいて、紙焼き資料を入手することができた。ここに記して関係者に謝意を表する。石山寺一切経については、同寺に所蔵される聖教類とともに長年にわたって調査を進めておられる、石山寺総合調査団、特に団長の奥田勲先生にお力添えをいただき、奈良文化財研究所で撮影したものの紙焼き資料を利用させていただくことが可能になった。こちらに關してもここに記して謝意を表する。なお、同じように平安末期から鎌倉期にかけて書写・整備・編纂された写本一切経である、法隆寺一切経にも『普超三昧経』が現存することが確かめられるが、こちらはまだ入手できていない。
- (15) 日本に所蔵されている高麗藏再雕本については、馬場久幸著『日韓交流と高麗版大藏経』（法蔵館、二〇一六）において詳細に調査、研究がなされている。ちなみに、同書において、日本に現存する高麗藏再雕本のなかで最も印刷が古い版本とみられることが明らかになった、大谷大学所蔵本（元は嚴島神社蔵本とみられる）については、同大学図書館のご協力のもと、デジタル撮影したものを紙焼きのかたちで譲っていただけだったので、それについても調査を進める予定である。
- (16) 江戸時代に建仁寺所蔵の高麗藏再雕本と鉄眼版（黄檗版）全体の校合をなした人物としては法然院忍濃と丹山順芸が知られる。前者、法然院忍濃の校合本については、明治期に刊行された「日本校訂大藏経」（正正藏）の底本とされた。丹山順芸の校合本は、その複本が東本願寺に納められたが、現在は大谷大学図書館に所蔵される。
- (17) 房山石経の石刻年代については、陳燕珠『房山石経中遼末与金代刻経之研究』（覺苑文教基金会、一九九五）による。また、日本語で書かれた総論・各論におよぶ先駆的な研究としては氣賀澤保規編『中国仏教石経の研究―房山雲居寺石経を中心に』（京都大学学術出版会、一九九六年）がある。契丹藏については、竺沙雅章「契丹大藏経小考」（『宋元仏教文化史研究』、汲古書院、二〇〇〇年、初出一九七八年）など参照。
- (18) 宮内庁書陵部蔵福州版大藏経の来歴については、中村一紀「書陵部所蔵宋版一切経の来歴について、その印造から現代まで」（田島公編『禁裏・公家文庫研究』第二輯、二〇〇六年）に詳しい。
- (19) 日本に輸入された宋版一切経全般に関する最新の研究としては、大塚紀弘『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、二〇一七年）所収の「第三章 宋版一切経の輸入と受容」があり、それに日本に渡来した記録のある宋版一切経について、先行研究を含めてほぼ網羅的にまとめられている。
- (20) 船山前掲論文参照。
- (21) 宮内庁蔵福州版は http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=0070 で閲覧できる。ちなみに、同サイトは「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧―書誌書影・全文影像データベース」(http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_search.php) の一部であり、宮内庁書陵部に所蔵される貴重な漢籍資料群が現在インターネット上で閲覧可能になっている。
- (22) 杏雨書屋蔵本については、古泉圓順『杏雨書屋蔵 磧砂版大藏経目録』（武田科学振興財団、二〇一七年）に詳しい。
- (23) 明代以降の版本大藏経については、野沢佳美『明代大藏経史の研究―南蔵の歴史学的基础研究』（汲古書院、一九九八年）が詳しい。また、同『印刷漢文大藏経の歴史―中国・高麗篇』（シリーズ・アタラクシアVol.3、立正大学情報メディアセンター、二〇一五年）は、図版も豊富で、中国、朝鮮半島における印刷大藏経の歴史、概要を知る上で至便である。
- (24) 増上寺所蔵の思溪藏と普寧寺藏については、大正藏編纂の際に対校本として用いられたとされるが、現在は重要文化財の指定を受けており、一般に閲覧する

ことは容易ではない。その両本に関しては浄土宗総合研究所の柴田泰山師より格別のご配慮とお力添えをいただき、デジタル撮影したものを利用させてもらうことができた。ここに記して謝意を表する。東京大学総合図書館所蔵の嘉興蔵については現在インターネット上で画像を閲覧することができる (<https://dzkings.lutokyo.ac.jp/ikka/>)。

- (25) 版本大蔵経が三種の系統に分かれるであろうことは、古くは禿氏祐祥「大蔵経の宋本、契丹本並に高麗本の系統」(仏誕二千五百年記念学会編『仏教学の諸問題』岩波書店、一九三五年)で指摘され、竺沙雅章「漢訳大蔵経の歴史―写経から刊経へ」(『宋元仏教文化史研究』汲古書院、二〇〇〇年、初出一九九三年)によって詳細に論じられている。

- (26) 竺沙前掲論文参照。ただし、険峻な山々に隔てられた四川地方は、確かに、中央からみて辺境に位置するものの、唐末の戦乱から離れていたために、中央の文化人が多く移住し、比較的水準の高い文化を維持していたこともあったために、宋太祖・趙匡胤によって、史上初の大蔵経の開板事業がこの地方に課せられたという事情もあることを考慮する必要がある。また、開宝蔵は四川で開板されたものとはいえ、それがもとづいた写本一切経については、蜀(四川)地方に伝わったものか、あるいは中央から運んだものかわかっていない。勅命によって制作された勅版という事情も考えると、後者の可能性も十分に考えられるように思う。
- (27) 近年、日本の古写一切経や複数の刊本大蔵経資料を用いた、批判的な研究がなされつつあり、着実な成果を生み出している。本研究紀要の先行巻号所収の諸論考は言うに及ばず、特定の典籍に関する優れた成果としては、船山徹『東アジア仏教の生活規則梵網経―最古の形と発展の歴史』(臨川書店、二〇一七年)、同『*The Fanwang jing (Sūtra of Brahma's Net) in the First Edition of the Korean Canon: A Preliminary Survey*』(ZINBUN 45・二〇一五年)、池麗梅『続高僧伝』研究序説―刊本大蔵経本を中心として(『鶴見大学仏教文化研究所紀要』十八号、二〇一三年)などを挙げるができる。

- (28) ただし、奈良朝から平安中期にかけて、中国から写本一切経全体がまとめて

もたらされた記録はなく、遣隋使、遣唐使などで派遣された僧侶や役人、文人らによって、個別に収集されて、日本にもたらされたものを、経録などをもとに集成されるかたちで、日本では一切経がまとめられていったものとみられる。実際、代表的な奈良朝一切経である「五月一日経」は、最終的には七千巻を超えたことされ、当時、標準とされていた『開元釈教録』記載の「五〇四八巻」を大きく超えるものであったという。先行研究によれば、当時の日本では一切経に入れるべき典籍かどうかの判断をしかね、中国撰述の仏典も含めて、伝わった仏典すべてを書写したことによる巻数であるとされるが、すなわち、これは中国で編纂されていた一切経の具体的な全体像がつかめずに、「正規の」一切経のセットはまだ揃っていないことによるものである。平安中期に至るまで、最澄、空海ら、入唐八家による請来目録に代表されるように、個人による仏典の将来は継続され、日本における一切経の拡充・収集は図られ続けたようである。それに終止符を打つことになったのは、奮然による開宝蔵の請来であり、はじめて日本にセットとしての一切経・大蔵経がもたらされたとみられる。

- (29) 以下、『普超三昧経』における異読のロケーションについては、大正蔵第一五巻における頁数を表記する。先に断ったように、現時点では直接参照できていない、宋・思溪蔵、元・普寧寺蔵、明・嘉興蔵の異読については大正蔵記載のものによる。また、(三) というのは右の江南諸蔵三種を指す。

- (30) 以下、経録での記述を列挙する際に冒頭に付す記号については次のとおり。

●三巻本と四巻本の両方の記載が確認できる用例

○四巻本のみ記載が確認できる用例

●三巻本のみ記載が確認できる用例

アステリスクを付したものは、経巻の現物を確認していないと類推される記述である。

- (31) 『出三蔵記集』がよったところの、最初の経録とされている、道安撰『綜理衆経目録』(通称、道安録)の記載については、その巻数が一卷ということから、巻数などの表記もなく、非常に簡潔なものであったという見方もなされている。

林屋友次郎「隋代経録に関する研究」(宮本正尊編、常盤博士還暦記念『仏教論叢』、弘文堂書房、一九三三年) 参照。以下で検討する経録の性格などについては同論文および小野玄妙『仏教経典総論』(仏書解説大辞典別巻、大東出版社、一九三六年)、岡部和雄「入蔵録の比較研究―『仁寿録』『内典録』『静泰録』について」(中村元博士還暦記念会編、中村元博士還暦記念論集『インド思想と仏教』、春秋社、一九七三年)などを参照した。

(32) ただし、不審な点として『翻梵語』に記されている語彙については、現行の『普超三昧経』には確認できていない。ひょっとすると、『翻梵語』の編者が見た同経四巻本のテキストと現行のものは大きく異なっていた可能性も考えられる。

(33) 大内文雄『大周刊定衆経目録』の成立と訳経組織―訳経従事者の所属寺院を中心として(落合俊典編『中国・日本経典章疏目録』(七寺古逸経典研究叢書第六巻)、大東出版社、一九九八年) 参照。

(34) 竺沙前掲論文「契丹大蔵経小考」および方廣鋤『中国写本大蔵経研究』(上海古籍出版社、二〇〇六年) 参照。

(35) 『普超三昧経』の巻数については、六世紀の『出三蔵記集』に現れるものが最古であり、その時点で三巻本と四巻本が併記されているので、いずれが本来的なものであったかについて、現時点では不明としておくほかない。ただし、基本的に漢訳経典では時代が下るにつれて、一巻あたりの長さが短くなる傾向がみとめられるので、四巻本のほうが時代が下って編集されたものである可能性が考えられるが、確かな証拠は現時点では見出せない。

(36) 例えば小野前掲書七八二頁。また、野沢佳美前掲書『印刷漢文大蔵経の歴史』の本文にはそのような記述はないが、同書七九頁に掲げられた版本大蔵経の系統図では、江南諸蔵は開宝蔵の系統を受けているように描かれた図がみられる。

(37) この可能性については、竺沙前掲論文「契丹大蔵経小考」や池前掲論文「『続高僧伝』研究序説」などでも認められている。

(38) 方廣鋤(藤井律之訳)「漢文大蔵経の定義、時期区分およびその特徴」(『中国宗教文献研究』、臨川書店、二〇〇七年) 参照。

(39) 現時点で全てを数え上げたわけではないが、相対的に興聖寺一切経のほうが単独の異読は少なく、七寺一切経のものよりは良本として捉えることができるだろうか。筆致については、第一節でみたように、七寺本の方が全体的に筆致は丁寧であっても、興聖寺本のほうが良本の伝承系統を伝えるようである。これはそれぞれの底本となった資料の影響も大きい。

(40) 高麗蔵再雕本の底本については最新の成果として、柳富鉉(中野耕太訳)「高麗大蔵経についての新たな見解」(大高洋司・陳捷編『日韓の書誌学と古典籍』(アジア遊学一八四)、勉誠出版、二〇一五年)があるが、高麗蔵再雕本の大半は開宝蔵を底本としたことが指摘されている。本稿での検討はその説を裏付けるものである。

(41) 以下の調査では高麗大蔵経研究所 (http://ksutrarack/ritk_eng/index.do) で公開されている再雕本のデータを利用した。

(42) ちなみに、いずれの *Maishu* の訳語が『普超三昧経』においては本来的なものであるかという点については、前掲拙著でも調査したように、「溥首」という訳語が竺法護の訳出典籍に特有のものであるとともに、『普超三昧経』と同年に訳出されたとされる『光讚経』『正法華経』『持心梵天所問経』でも「溥首」という訳語が確認されることから、同訳語が本来的なものである可能性が考えられる。一方で、高麗蔵初雕本にみるように、本来は、同一典籍のなかでも、統一がなされていないかった可能性が考えられる。

(43) ただし、表二で示したように、房山石経本(底本は契丹蔵)でみられる *Maishu* の訳語は「濡首」であるのに対して、高麗蔵初雕本の巻上でみられる訳語は「軟首」であり、思溪蔵・福州版に確認できる訳語と共通する。これだけに着目すれば、初雕本の巻上は江南諸蔵の四巻本の系統を参照して訂正された可能性も考えられるものの、巻数構成の違う江南系のものを参照したと考えるよりも、巻数構成も同じで、ある程度の近接性も確認できている契丹蔵に近い系統を参照したと考えておく方が妥当であると判断した。別の可能性としては、初雕本の巻上全体が別系統のものと入れ替わった可能性も考えられるが、その場合は当

該の別系統と顕著な近接性を示すはずで、それが確認できていない限り、卷上について他本を用いた改訂という可能性を考えておいた方がよいだろう。

(44) 例えば、竺沙前掲論文「漢訳大藏經の歴史―写經から刊經へ」では、特定の典籍に関しては、聖語藏經卷が契丹藏に近い読みを保持していることを示唆しており、本稿での検討結果とは異なる。先にも注記したように、奈良時代から平安時代中期に至るまで、日本には一切經・大藏經はセットとして、まとめてもたらされたことはなかったと考えられ、主に唐土において個人が収集した經卷を集成するかたちで、日本では一切經のセットの構築、拡充が図られたとみられる。よって、奈良時代以降に日本で書写された写本一切經も、各典籍ごとに様々な背景や来歴、事情を抱えたものであったことが十分に予想される。